

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Paris/Marseille (10-1/2005) :  
Integration/Discrimination of the Cultural Others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003954">https://doi.org/10.15021/00003954</a>

## パリ／マルセイユ, 2005.10-11

### —文化の名による統合と排除—

竹 沢 尚一郎\*

Paris/Marseille (10-11/2005):  
Integration/Discrimination of the Cultural Others

Shoichiro Takezawa

2005年はヨーロッパ各国で、文化の名による問題が噴出した年であった。移民第2世代が主体となったロンドンの地下鉄テロや、フランス各地の郊外で発生した「都市暴動」、デンマークの日報によるムハンマドの風刺画の掲載など、事例は枚挙にいとまがない。

これらの事件の背後にあったのは、EUの拡大とグローバル化の進展によって国民国家が弱体化したという意識であり、そのため内的境界としてのナショナリズムが各国民のあいだで昂進したことであった。その結果、外国人移民およびその子弟や、イスラームに代表される文化的他者に対する排他意識は、これまで以上に高まっている。

従来、文化的他者の統合については2つのモデルが示されてきた。文化的アイデンティティに沿って共同体を形成することを求めるアングロサクソン系の多文化主義と、公の場で宗教の表出を禁止し、個と国家のあいだに中間団体を認めないフランス式共和主義である。しかし、2005年に英仏両国で生じた一連の事件は、両国とも文化的他者の統合に成功していないことを示している。多文化主義も共和主義も文化的他者の統合に成功していないとすれば、私たちはどこに統合のモデルを求めればよいのか。

産業革命以降、工業化に成功した諸国ではさまざまな社会問題が生じたが、問題に直面した人びとが団結して社会運動を起こすことでこれらの問題は解決するはずだ、というのが社会学のメタ物語であった。しかし、文化をめぐる問題が多発している今日、文化の諸問題を解決するためのメタ物語はまだ見つかっていない。フランスでは80年代以降、移民の子弟を中心にさまざまな社会運動や文化運動がつけられてきたが、問題の解決には程遠いのが現状である。

---

\*国立民族学博物館民族文化研究部

**Key Words** : culture, cultural others, discrimination, integration, locality, multiculturalism

**キーワード** : 移民, 文化的他者, 統合, 排除, 多文化主義, ローカリティ

本稿では、2005年のパリとマルセイユでおこなった現地調査にもとづきながら、文化の諸問題に対する効果的なアプローチを構築することを目的とする。国民国家に倣って境界づけられ、内部における等質性と外部に対する排他性を付与された文化の概念を、いまなお使いつづけるべきなのか。あるいは、複数の文化の出会い場としてのローカリティやテリトリー、空間の概念によって代替すべきなのか。それらの問いを具体例に沿って問うことが、本稿の課題とするものである。

Several bombs exploding on the London Underground, and the arson of 20,000 cars in the suburbs of French cities in 2005 demonstrated the catastrophic growth of cultural problems in European countries. Brought about by the younger generation of immigrant laborers, these incidents testify to the failure of the multicultural model of integration adopted by the British Government and the Republican model of integration held sacrosanct by the French Government.

The background to these incidents can be found in the explosion of nationalistic sentiment that European peoples are experiencing. Feeling threatened by EU expansion and the process of globalization, they are trying to construct inner barriers by emphasizing their “own” cultural heritage and discriminating against Cultural Others living in the same country.

Since the Industrial Revolution, industrialized countries have been confronted with social problems such as poverty, environmental pollution and deterioration of the environment. Activists and sociologists have thought that social movements, once properly organized, could solve these problems. That has been the master narrative of modern sociology, which has shaped itself as a theoretical and practical response to those problems. In contrast, socio/cultural anthropologists have not yet found a master narrative to solve the cultural problems we are confronted with.

Should we reject the notion of culture, formulated as something homogeneous on the inside and exclusive on the outside, following the model of the Nation-State? Or should we replace this notion of culture with another, such as locality or space where many cultures can meet and co-exist? To find some answers to these questions is the focus of this article, based on my field researches in Paris and Marseille in 2005.

はじめに	5	フランス共和制と文化
1 問題の所在 社会から文化へ	6	2005.11 パリ／マルセイユ
2 フランスにおける外国人移民の歴史	7	考察
3 排除される都市郊外の若者たち		結論
4 文化の名による統合の試みと排除		

## はじめに

2005 年は、ヨーロッパ各国で移民<sup>1)</sup>をめぐる問題があいついで生じた年であった。2005 年 7 月、ロンドンの地下鉄で 4 つの爆弾が爆発し、50 人以上の人命が失われた。この事件を引き起こしたのは、イギリス国籍をもち、イギリス国内で職に就くか高等教育機関に在籍する、パキスタン系の移民第 2 世代の若者であった。その 2 週間後には別の爆破事件が計画され、さいわい未然に防止されたが、これも主導したのは東アフリカ系の移民の子弟であった。パキスタン系やアフリカ系の移民の子弟たちは、イギリス国内ではもっとも失業率が高く、暴力行為をはじめとするさまざまな差別にさらされている<sup>2)</sup>。そのなかでは、就職や就学を通じてイギリス社会にうまく「統合」されていたと信じられていた若者が引き起こした事件であっただけに、これらの事件がイギリス社会に引き起こした衝撃はきわめて大きなものがあった。

一方、同年 10 月下旬にはパリ近郊のクリシー・スーボワ市で、警官の職務質問を逃れるために変電所に逃げ込んだ 2 人の少年が感電死したことを引き金として、フランス全土の都市郊外でいわゆる「都市暴動」<sup>3)</sup>が発生した。3 週間のあいだに約 2 万台の車が放火され、100 台以上のバスや数十の公共施設に火がつけられたが、これも主体となった若者の多くは移民の第 2 世代であった。国籍の出生地主義をとるフランスでは、フランス生まれであるかれらは成人と同時にフランス国籍を得ることができる。そのかれらが引き起こした事件であり、事件の拡大に手を焼いたフランス政府は、約 50 年ぶりに非常事態宣言を出すところまで追いつめられたのである。国内治安の最高責任者である当時のサルコジ内相（現フランス大統領）が、「郊外のゴロツキども」を掃除機で一掃してやる」などの挑発をくりかえしたことが、事件拡大の一因であったのは疑いない（10-16/11/2005: 30 *Le Nouvel observateur*）。とはいえ、フランスの都市郊外では毎年のように放火事件が起こり、とくに 2000 年以降は毎年 2 万台以上の車に火がつけられていることを考えるなら（Bauer et Rauter 2005: 35）、事件は起こるべくして起こったのである。

これに対し、その隣国のスペインでは、近年まで外国人移民の数は限られていた。しかし、1986 年のヨーロッパ共同体加盟にともなう経済発展の結果、国内に多くの非正規滞在者<sup>4)</sup>を抱えるようになった。スペイン政府は 2004 年末に、これらの移民労働者の合法化を決定し、2005 年 2 月からの 3 ヶ月のあいだに 56 万人に対する就業ビザ発行の手続きをおこなった。この決定の背後にあったのは、国内に「隠れて」い

る非正規滞在者に法的措置を与えることで、より有効に管理しようという意図であった。しかし、いったんスペインで合法化された人間は、ヨーロッパ連合（以下 EU と記す）のどの国にも移住することができるだけに、この方針は移民問題を抱える他の国々から激しい非難と反発を浴びた。実際、この措置の前後から、国境での警備が比較的ゆるやかで、合法化されやすいスペインをめざす西アフリカ等からの移民希望者は急増しており、途上の砂漠や海上で生命を失う人間の増加は深刻な国際問題になっている。

その他、デンマーク最大の日刊紙である『ユランズ・ポステン』紙が、イスラームの預言者ムハンマドを風刺した戯画を掲載したことで、ヨーロッパ各国のイスラーム団体はいうまでもなく、モロッコからマレーシア、インドネシアにいたるイスラーム世界全土で激しい反発を招いたのもこの年であった。また、オランダで反イスラーム的映画を発表していた映画監督テオ・ファン・ゴッホ氏が、イスラーム主義的なモロッコ系オランダ人に 2004 年に路上で殺害されたのを受けて、それまで異文化の受容に寛大とされてきたオランダでも、移民政策の見直しのための議論がおこなわれるようになったのもやはりこの年であった。

このように見てくると、まさに 2005 年は、ヨーロッパにおける移民問題が集中して火を噴いた年であったことが理解される。本稿は、このようなヨーロッパ全体の状況を考慮に入れながら、2005 年 10 月から 11 月にかけて、フランスにおいて移民の「統合」をめぐるいかなる状況が生じていたかを考察することを目的とする。そのために、本稿はまずフランスにおける外国人移民受け入れの歴史と、かれらに対してとられてきたさまざまな対策や措置を概観する。その上で、パリ近郊であれだけ多くの移民第 2 世代の若者たちが行動を起こしたのに対し、パリ第 2 の都市であり、大量の移民を受け入れてきたマルセイユではなぜそれが生じなかったのかを、現地でのインタビューも紹介しながら考えていく。

外国人移民とその子弟に対しては、かれらは文化的他者であるがゆえに国外に排除されるべきだとする極右政治家の発言が、ヨーロッパ各国で支持を増大しつつあるという状況がある<sup>5)</sup>。このように、文化はしばしば排除の道具として用いられているのであるが、それが「統合」の媒体になることは可能なのか。そうなるためには、私たちは文化概念をどうつくり変え、あるいはどのように他の概念と接合させなくてはならないのか。それを考えていくことも、本稿が課題とするものである。

## 1 問題の所在 社会から文化へ

本論に入る前に、移民をめぐる諸問題に私がどのような観点から取り組もうとしているのかを明らかにしておこう。移民をめぐる問題は多岐にわたるが、これまで主としておこなわれてきたのは、それを社会問題として論じることであった。すなわち、それぞれの社会が置かれている社会経済的状況を踏まえた上で、各国政府や地方機関が外国人移民とその子弟の受け入れのためにとってきた政策や措置の有効性と限界を社会的に検討することである。

その観点からするならば、最初に問題化されるのは、2004年に東欧10ヶ国を加えることで25カ国にまで増加したEUの拡大と、それに対する各国国民の反作用であろう。EUの拡大は、企業活動の活発化のための市場の拡大を意味しただけでなく、所得と社会保障に格差のある東欧諸国を内包したことにより、企業は低賃金の労働者を使役することが容易になった。その結果、西側の企業は軒並み好成績を収める一方で、勤労者の賃金は少しも上がっておらず（図1）、失業率の改善にもつながって

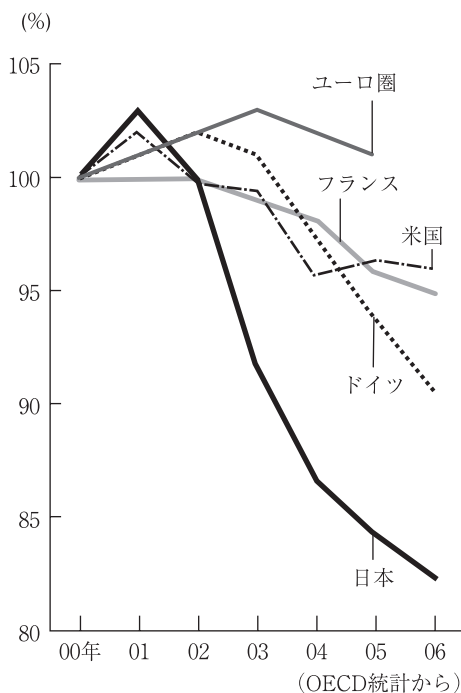


図1 単位労働費用の推移（朝日新聞 2007.4.11 より引用）

ない。

従来、フランスやドイツなどでは労働組合がきわめて強固であり、その主張や運動を通じて社会保障の拡充や社会統合が実現されてきた。ところが、EUの拡大とそれに結びつく経済の自由化によって労働組合等の活力が低下したことは、社会問題の解決のために行動しうる社会的アクターの力が弱体化したことを意味した。フランスの著名な社会学者であり、社会運動にも造詣の深いアラン・トゥレーヌやジャック・ドンズロが認めているように、もはや中心的な問題は、階級と階層をベースにした垂直的な社会モデルのなかで、分裂を回避しうるアクターを発見することではない。問題はむしろ、多国籍企業が進出して急速に再編成されている都市中心部と、失業者や移民が集住する都市周辺部というように、分断と排除が水平的におこなわれている状況を踏まえつつ、全体の「統合」<sup>6)</sup>を可能にする社会的ないし文化的メカニズムをつくり出すことである (Donzelot 1996; Touraine 2005)。

私がここでおこないたいことは、以上のようなヨーロッパ、とくにフランスにおける移民の問題を、社会の観点からではなく、文化の観点から論じていくことである。従来、わが国におけるヨーロッパの移民問題の研究は、社会学者や政治学者の手によっておこなわれるのが常であった (梶田 1993; 浪岡 2003; 内藤 2004; 宮島 2006)<sup>7)</sup>。しかし、それらは問題を「上から」見る傾向が強く、各種の統計や文献資料が駆使されることで全体像の把握には成功しているが、内藤や浪岡の研究を除いて、現地の人びとの声が聞こえてくることもなければ、問題の実態も見えてこないもどかしさがある。ようやく近年になって、人類学の分野でも、フィールドワークを踏まえた移民の問題がとり上げられるようになり、いくつかの成果が生み出されている (植村 2004; 渋谷 2005; 森 2006)。しかし、これらの試みはまだ始められたばかりであり、大きく前進させる余地が残されている。

なぜ、ヨーロッパ諸国における移民の問題を、社会的な問題ではなく、文化の次元の問題としてとりあげていくのか。またそうすることで、文化人類学という学問分野に対し、いかなる課題と視点の刷新をもたらすと期待されるのか。それを最初に整理しておきたい。

移民の問題を文化の問題として考えていくこと理由の第一は、フランス国内で、宗教スカーフで頭髪を覆った女子学生が学校から追放されるなど、文化をめぐるさまざまな問題や係争が生じていることである<sup>8)</sup>。この問題は最初、1989年にパリ近郊のクレイユ市の一中学校の学校長が宗教スカーフをかぶって登校してきた女子学生を、1905年の法で定められたライシテの原則<sup>9)</sup>に抵触するとして、教室に入ること



を禁止したことに端を発したものであった。これ以降、彼女たちをどう遇するかという問題はフランス全体を揺るがす大問題となり、右派と左派のあいだで政権が変わるたびに方針も大きく変更された。最終的には、2004年2月に公の場で顕著な宗教的徴表を明示することを一切禁止する法律が批准されることで、幕引きが図られた。その結果、ムスリムのスカーフであれキリスト教の十字架であれ、宗教的なシンボルを明示することを求める学生は、私立の学校に行くか、家庭学習で満足することを余儀なくされているのである<sup>10)</sup>。

このような措置が国民に広く許容されている背景には、共和国に関するフランス独特の理念がある。フランスは1789年の大革命以来、4度の革命を通じて、王や貴族、キリスト教会などがもつ既得権益をすべて廃止して、等しい資格をもつ諸国民からなる共和国の建設をめざしてきた。憲法が「一にして不可分の共和国」と明記していることが示すように、フランスは中間団体の存在を公の場では認めておらず、それゆえ国勢調査においても出身や宗教を問う項目はない。すべてのフランス国民は、カトリックやムスリム、あるいはハンガリー系やアルジェリア系としてのアイデンティティを主張する以前に、いかなる文化的属性によっても規定されない一市民として共和国建設に努めることが求められているのである。

あらゆる市民を、文化的属性を剥ぎとった裸の個人としてフランス共和国のなかに「統合」していこうとするこうした方針はフランスに固有なものであり、イギリスやアメリカ合衆国などが採用するいわゆる「多文化主義」<sup>11)</sup>とは異質なものである。国民国家において文化はいかなる位置を占めているのか。文化的同質性以外のものによって国民国家を基礎づけることは可能なのか。あるいは、複数の文化的集団が存在するとき、国民国家はなにをもって基礎づけられるのか。国民国家の存在そのものにかかわるこれらの問いについてはのちに検討するが、移民の問題が突きつけているのはこれらの問いなのである。

移民の問題を文化の問題として位置づけることの理由の第二は、公教育における宗教スカーフであれ、イギリスやフランスにおける諸事件であれ、その主体となっているのは移民、とくにイスラーム諸国からの移民の第二世代、第三世代の若者だということである。従来、移民研究の多くは移民第一世代の研究であり、かれらの動機を探ることと、かれらの受け入れのための法的・政治的措置に関する論議がほとんどである(内藤2004; 森2006など)。このとき、かれら移民の第一世代の多くは、自分が育った出身社会に社会的・文化的に強く結びつけられ、アイデンティティの根拠もそこに置くのが一般的である。そのためかれらの問題の多くは文化的というより、むしろ地



方参政権の付与や社会保障などの法的・社会的措置にかかっている。

これに対し、移民の二世代の場合、国籍はフランス人であり、受けた教育も育った文化的環境もフランス以外のなにもものでもない。たとえばある調査によれば、マグレブ出身の両親から生まれた若者の71%が両親の文化よりフランス文化に親近性をもち、73%が非マグレブの異性との性交渉の経験があると答えるなど、かれらは意識においてはフランス文化のうちにある（2-8/12/1993: 6 *Le Nouvel observateur*）。

しかし、後で見るようなさまざまな差別にさらされ、しかも失業率がマグレブ系移民の子弟の場合には50パーセントに達していることもあり、かれらの多くはフランス社会に「統合」されているとは考えていない。両親が受け入れている出身国の文化と、自分が育ったフランス文化とのあいだで引き裂かれているかれらは、自分のアイデンティティを見つけるのに困難を覚えているケースが多いのである（Dubet 1987）。移民の二世代は、どのように自分たちのアイデンティティを構築しているのか。そうした状況において、文化はどのように排除の道具として活用され、またどのようにすれば統合の媒体になりうるのか。それが問われているのである。

理由の第三は、上にも述べたEUの拡大とEU議会の権限強化等により、各国政府の権限が弱体化されつつあり、このことが各国民の意識においてナショナリズムと文化的排斥の強化を招いていることである。外国人排斥を綱領に掲げる極右政党のうち、フランスで代表的なものとして国民戦線がある。この政党の前身は、フランス国内で移民の問題が焦点化されはじめた1970年代までは、移民に対して散発的に暴力をくりかえすだけの暴力集団でしかなかった。ところが72年に国民戦線を結成し、とくに80年以降、マグレブ系移民の姿が社会のなかで可視化されるとともに、移民の排斥と治安の強化を主張するこの政党への支持は急増した。しかもそれは、文化人類学の支柱のひとつである文化相対主義を流用することで理論武装をはかり、毎年の選挙で20パーセント前後の得票率を獲得するまでに伸長しているのである。

かれらの主張はつぎのことにある。文化はそれぞれに価値をもつものだから、文化の差異は尊重されるべきである。各自が生まれ育った、あるいは両親から受け継いだ文化は、その人間の身体のうちには骨肉化されているので、容易には変更不可能である。現在のフランスは、「本物のフランス文化」と外国人移民の異質な文化とが混在しているので、混乱した状態にある。それゆえ、フランスは「フランス文化」に同化不可能な移民とその子弟を出身国に送り返すことで、文化的純化を通じて社会と文化の活力を取り戻すべきである（フィンケルクロート 1988; 畑山 1997)<sup>12)</sup>。

こうした主張に、文化相対主義の理念の悪質な流用があることは容易に見てとるこ

とができる。文化を固定的なものとし、そのあいだの対話が不可能だとするハンチントン流の「文化的排他主義」。文化を特定の集団に一体化させることで、文化の境界の強化と内部での純化を求める「文化的本質主義」。そして、文化が集団の成員の身体のうち骨肉化しているがゆえに、その変更は不可能だとする「新人種主義」(バリバルとウォーラーステイン 1997) などである。とはいえ、それらが、文化人類学が骨子としてきた文化相対主義の主張とまったく無縁なものではないことも明らかであろう。とすれば、つぎのように問うことも必要なのではないか。多数派ないし西洋諸国の圧倒的な文化的圧力のもとにさらされた少数派集団の文化的価値を承認することを目的として概念化された文化相対主義は、どのようにして排除の道具として活用されるようになったのか。文化が排除の道具とならないためには、どのような文化概念や国民概念のつくり替えが必要なのか。

以上のようにヨーロッパ諸国における移民の問題を文化の問題として位置づけていくことは、国民国家と文化のあいだの関係や、複数の文化の共存可能性、現代社会におけるアイデンティティの問題、文化概念の再検討など、人類学の中心的な課題のいくつかを問うことにつながっている。とりわけそれは、これまで少数派の文化をあえていうが「偏愛」してきた人類学に対し、世界の各地で文化をめぐる問題が頻発しているという状況に目を開かせ、自己の営為に対して反省させる契機にもなるであろう。

1998年に『岩波講座文化人類学』の1巻として『文化という課題』が出版されたとき、それはこのような問題関心に立った試みとして、革新的な意義をもつものであった。しかし奇妙なことに、同年に出版された太田好信の『トランスポジションの思想』や2006年の関根康正の『宗教紛争と差別の人類学』などを除けば、そうした試みは継続されてこなかった。私には昨今の人類学的実践の多くは、文化が世界各地でさまざまな問題を引き起こしているという事実から目をそむけ、地域文化やマイノリティ文化の偏愛へと「内閉」しているように見える。これに対し本稿は、「文化がもたらしめている課題」を検討していくことを通じて、「文化という課題」を考え直すことを目的としている。その意味で、本稿は人類学を現代世界の抱える諸問題へと挿入ないし再挿入する試みである。

## 2 フランスにおける外国人移民の歴史

最初に、フランスにおける外国人移民の歴史を概略することにしよう。産業革命は

大量の労働者を必要とするが、農地の囲い込みによって農村人口を都市へと流出させたイギリスと異なり、革命によって土地を手中にしていたフランスの農民は都市への移動を希望しなかった。しかも、フランスは19世紀にすでに人口停滞を経験していたこともあり、産業革命の遂行のためには外国人移民の導入が不可欠であった。今日のフランス国民の20%が外国人を少なくとも両親ないし祖父母のひとりにもつといわれるほど (Tribalat 1991: 71)、フランスはこの2世紀に渡って多くの外国人労働者を受け入れてきたのである。

外国人移民は、19世紀から20世紀初頭にかけては隣国のベルギー、イタリアの移民が主であった。しかし、これらの国でも産業革命が進行した結果、表1にあるように、1920年頃からは文化的に近い、おなじカトリック圏のスペイン、ポーランドからの移住者が多くなった<sup>13)</sup>。一方、第二次世界大戦が終了すると、フランスは「栄光の30年」といわれる経済成長を実現し、急成長した自動車産業や電機産業等に向けて、海外領土であるアルジェリアや植民地のモロッコ等のマグレブ諸国から大量の単純労働者を導入した<sup>14)</sup>。かれらは工場が用意した寮に住み、工場ではおなじ職場で固まって働くのでフランス語を話す必要もなく、工場と寮を往復するだけの単調な生活を送っていた。そして数年たち、一定の資金をためると帰国して、おなじ村の他の若者と交代するのが一般的なパターンであった (宮治 1983)。フランスの植民地支配は1960年代前半に終了し、これらの国々はこぞって独立を迎えたが、植民地期に形成された移民労働者の所得をあてにした経済体制はその後もつづいたのである<sup>15)</sup>。

ところが、1973-1974年のオイルショックによる経済危機を契機に、フランスはそ

表1 フランスにおける外国人の割合 (INSEE 1994: 17 より)

nationalities	1921	1931	1954	1968	1975	1982	1990
<b>Europeans</b>	<b>93.7</b>	<b>90.5</b>	<b>81.8</b>	<b>72.3</b>	<b>61.1</b>	<b>47.8</b>	<b>40.7</b>
Germany	4.9	2.6	3.0	1.7	1.3	1.2	1.5
Belgian	22.8	9.3	6.1	2.5	1.6	1.4	1.6
Spanish	16.6	13.0	16.4	23.2	14.5	8.8	6.0
Italian	29.4	29.8	28.7	21.8	13.4	9.2	7.0
Portugais	3.0	1.8	1.1	11.3	22.0	20.7	18.1
<b>Africans</b>	<b>2.5</b>	<b>3.9</b>	<b>13.0</b>	<b>24.8</b>	<b>34.6</b>	<b>43.0</b>	<b>45.4</b>
Algerian			12.0	18.1	20.6	21.7	17.1
Moroccan			0.6	3.2	7.6	11.9	15.9
Sub-saharan			0.3	2.3	2.0	3.4	4.9
<b>Asians</b>	<b>1.9</b>	<b>3.2</b>	<b>2.3</b>	<b>1.7</b>	<b>3.0</b>	<b>7.8</b>	<b>11.8</b>
Turkie	0.3	1.3	0.3	0.3	1.5	3.3	5.5

れまでの移民の全面受け入れ政策を転換させ、外国人移民を原則的に禁止した。その結果、移民を定期的に送り出していた旧植民地社会では新規の移民が不可能になったが、かといってその経済は移民の送金なしでは成り立たなくなっていた。そこで、すでに本国を離れていた移民はそのままフランス社会にとどまることを決め、故郷の村や町から家族ないし結婚相手呼び寄せようになった<sup>16)</sup>。このような政策と送り出し方の変化が、フランス社会に対して与えた影響は大きかった。外国人およびその子弟の数が増加しただけでなく、劣悪な生活や労働条件の改善を求めて声を上げはじめするなど、かれらの姿はフランス社会のなかで可視化されるようになり、その文化的異質性が目につくようになったのである。それにともない、かれらに対する極右勢力を中心とする排斥は激しくなるばかりであった（ギヤスパールとセルヴァン＝シュレーベル 1989; ハーグリーヴス 1997）。

一方、経済危機が進行するなかで、生産効率を高めるべく企業は機械化やロボット化を推し進め、外国人単純労働者を中心に首切りをおこない、1980年以降毎年12万人平均の失業者を生み出した（Maurin 1991: 44）。その一方で、国立統計研究所のトリバラらが明らかにしたように、安価な労働力を求める産業資本家や商店主の要求は減少することなく、産業構造の変化のショックを和らげるための「緩衝材」ないし「安全弁」として、一定数の移民の移住を求めつづけ、雇用しつづけた（Tribalat 1991: 255-259）。労働許可証をもたないかれらは、繊維産業、建設業、サービス業、警備業などの不安定な職場で、多くの場合最低賃金以下の給料で働かされた（Maurin



写真1 都市周辺部の市場では多くのマグレブ系女性の姿が見られる

1991: 46-49; ジョリヴェ 2003: 3 章)。その結果は、地下経済の膨張であり、正規の滞在許可証をもたない「サン・パピエ (sans papiers)」と呼ばれる人びとが、百万を超えるオーダーで存在するようになったのである (Balibar et al. 1999; 稲葉 1998)。

こうした失業と非正規滞在者の増大に並行するかたちで、各種の犯罪の発生件数は図2にあるようにいちじるしく増大しており、1970年からの30年間のあいだにその数は3倍以上に達している (Bauer et Raufur 2005)。2002年の大統領選挙において最大の争点になったのが治安の問題であったことが示すように、今日のフランス国民の多くは治安維持を最大の課題と考えており、失業や交通問題、環境問題などの諸問題に比して、治安維持を重視する有権者の割合はふえるばかりである (表2)。フランス国民の多くは、治安上の不安や失業率の増大、経済運営の失敗による国際的地位低下、外国人移民の増加などの諸問題に対する政府の無力を痛感しており、1981年に戦後初の社会党大統領を誕生させたほか、国政選挙のたびに政権を交代させてきた。そして、国民の多くが抱く不安と不信に付け込むかたちで支持を拡大してきたのが、国民戦線に代表される極右勢力であった。

極右勢力は第二次世界大戦直後から政治活動をおこなっていたが、とりわけ海外領土であるアルジェリアの独立戦争をめぐってフランスが二分された1960年代から活動を活発化させた。国民戦線は1972年に結成されており、その主張は、翌1973年に出された綱領が「フランス人の防衛」と題していたことが示すように、フランス文化の「純粋」さを守ることと治安を強化すること、そのためのスケープゴートとして、

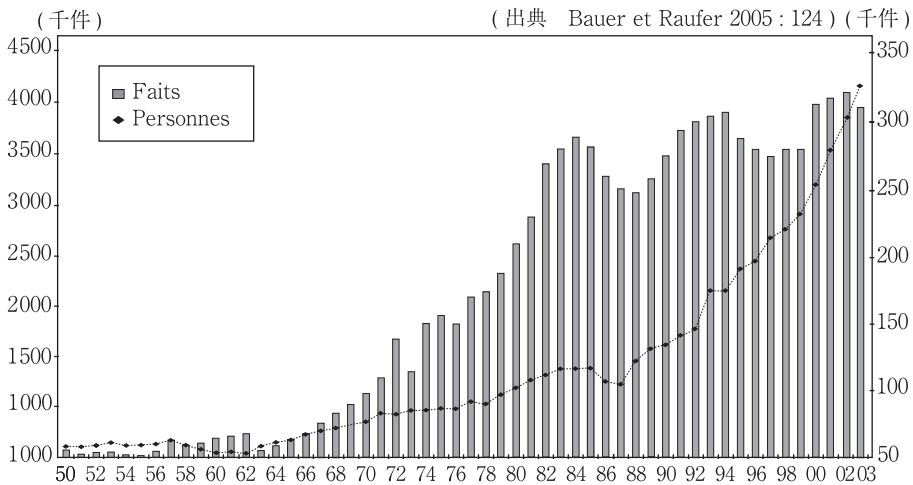


図2 フランスの犯罪件数 (左の欄は総件数, 右欄は暴力事件)

表2 フランス人はなにを問題視しているか、イル・ド・フランス県における世論調査 (Bauer et Xavier 2005: 7より)

Problem	1999	2002
Insecurity	52%	70%
Drugs		34%
Unemployment	48%	32%
Education	33%	31%
Transport	34%	31%
Environment	34%	29%

かれらが悪の元凶とみなす移民とその子弟を排除することにあつた (畑山 1997: 70)。

それは毎回の選挙で数パーセントの得票率しか獲得せず、各地で移民やその子弟に対する暴力事件を生じさせるだけの暴力集団でしかなかった (Viard 1984)。しかし、失業率の増大と社会不安が問題化した 1980 年代以降、フランス社会が抱える悪はすべて移民のせいだとするその主張は広く受け入れられるようになり<sup>17)</sup>、1982 年以降のすべての選挙において 15% から 20% 台前半の得票率を獲得するようになっている (畑山 1997)。それだけでなく、ニースやトゥーロンなど、フランス南部のいくつかの都市で市長を出すようになったほか、2002 年の大統領選挙では、ふたりのあいだでおこなわれる決選投票に残るなど、フランス政界を左右する勢力にまで伸長したのである。

### 3 排除される都市郊外の若者たち

治安や居住環境の悪化、失業の増大など、今日のフランス社会が直面している諸問題は、もちろん移民とその子弟だけに関わるものではない。そこでフランス政府も、有権者の支持を得るためにさまざまな解決の試みをおこなってきた。外国人移民をはじめとする低所得層に対しては住居政策がもっとも効果的と判断され、かれらを収容していたスラムに代えて、1960 年代以降、全国の大都市郊外に「仮住まい住宅」を建設した。また 70 年代になると、シテ (cité) と呼ばれる大規模団地を全国に建設することで、居住環境の改善を試みてきた<sup>18)</sup> (Lallaoui 1993)。

これらの施設は、住居をもたない低所得層だけでなく、住居購入をめざす若い夫婦が低家賃を利用して貯蓄をおこなうために活用することが期待されるなど、多様な階層の利用を想定して建設されたものであった。また、大都市の近郊には、自動車工場をはじめとする産業施設が環状に設置されていたので、職住近接のモデルケースにな



るものでもあった。実際、パリ郊外の北東南部に広がるシテを抱える多くの市町村は、労働運動の拠点になっただけでなく、「赤い郊外」と呼ばれるほど共産党や社会党の市長を輩出したところであった。かれらは団結して政府に働きかけ、居住環境の改善や住民のための文化予算の拡充など、一連の措置を実現させてきた。

とくに1981年以降は、国民統合をスローガンに掲げる社会党政権になったこともあり、積極的な改善政策が実施された。政府は、貧困層が多く住む地区を「都市開発優先地区」(ZUP, Zone à urbaniser en priorité)や「教育優先地区」(ZEP, Zone d'éducation prioritaire)に指定し、老朽化した団地の改築や地域団体の育成、教員の優先配置や教育補助の拡大、若者の就職支援、文化活動支援、企業誘致など、地元に着した支援活動を優先的におこなってきた(Madec et Murard 1995)<sup>19)</sup>。

そうした試みは、原則としては正しい方向に向いていたであろう。しかし実際の運営は、そうした統合に向けての原則を裏切るばかりであった。大都市近郊に位置し、交通の利便の良いシテには「生粋」のフランス人を優先的に住まわせ、電車やバスを乗り継いで行かなくてはならない不便なシテは、「有色」の移民とその家族に割り当てるなど、露骨な差別がおこなわれてきたことが報告されている(Simon 2003; FASILD 2003)。また、1980年代の経済危機以来、フランスの企業は老朽化した大都市近郊の工場を閉鎖し、単純労働者を中心に大量の解雇をおこなって、大西洋や地中



写真2 マルセイユ北部のシテ、ベランダにある衛星放送用アンテナはすべて地中海の向こうを向いている



海に面した利便性の高い土地に最新鋭の工場を建設してきた。かくして都市郊外および都市周辺部は、経済成長から取り残された、移民を中心とした低所得層の集住地区となっていくたのである (Madec et Murard 1995; Castel 1995)。

いくつかのシテでは、居住者の過半数が移民とその子弟となり、基本的に公教育であるフランスでは学校の選択の余地がないので、教育水準の低下も見られるようになった。治安の悪化、教育水準の低下、居住環境の劣悪化などの悪循環の輪が閉じられると、中間層や若い「フランス人」家族はそうしたシテから脱出を開始した。その結果、都市郊外のシテの多くは、移民とその子弟をはじめ、貧困層だけが取り残されるスラムと化していくたのである (Vieillard-Baron 1991; Dubet 1987)。

フランス国民の多くにとって、大都市郊外はどのようなものとしてとらえられているのか。具体的な数字を挙げることで、都市郊外のイメージを描いてみよう。住民あたりの犯罪件数や所得などで定義される「都市問題地帯 (Zones urbaines sensibles)」の指定を受けている地区は全国で 1200 ケ所あるが、その住民の 26.4% が非ヨーロッパ系移民であり (国平均では約 5%)、そこでは小中学校の児童の半数以上が非ヨーロッパ系移民の子弟である (10/11/2005, Libération)。フランス語をほとんど話さず、アイデンティティの根拠を出身国に置き、国籍を取らないので選挙権もない両親は一般に教育に熱心でなく、出生率も平均より高いので住環境の悪化につながりやすい。一方、かれらの子弟はさまざまな差別にさらされており、とりわけ深刻なのは失業率の高さである。表 3 にあるように、フランス人の失業率が 9.5% なのに対し、マグレブ系のそれは 30%、16-24 歳の若年層に限ってみれば、フランス人のそれが 20% であるのに対し、マグレブ系のそれが 50% と、若者の半分以上が学業を終えても仕事に就

表 3 フランスにおける失業率 (INSEE 1994: 83 より)

	total	15-24 years	25-49 years	Overs 50 years
<b>French</b>	<b>9.5</b>	<b>20.3</b>	<b>8.5</b>	<b>6.9</b>
Native	9.4	20.1	8.4	6.7
By acquisition	13.8	31.3	11.7	13.6
<b>Foreigner</b>	<b>18.6</b>	<b>29.8</b>	<b>17</b>	<b>18.3</b>
European	9.7	16.4	8.2	11
<b>African</b>	<b>29.3</b>	<b>50.1</b>	<b>27.2</b>	<b>27.2</b>
Algerian	29.2	44.6	28.2	28.2
Moroccan	28.2	49.4	24.8	24.6
Sub-Saharan	27.8	—	26.5	22.3
<b>Other nationality</b>	<b>16.4</b>	<b>28.6</b>	<b>15.2</b>	<b>15.2</b>
<b>Total</b>	<b>10.1</b>	<b>20.8</b>	<b>9</b>	<b>7.6</b>

くことができず、社会のなかでマージナル化されているのである（INSEE 1994）。

そのなかでも、2005年の一連の事件の発端になったパリ東部のクリシー・スーボワ市は、住民の平均年収がフランス全土で6番目に低い市町村であり、市域の80%が「都市問題地帯」に指定され、外国人移民の失業率は33%、18-25歳の若年層の失業率は60%に上っている（10-16/11/2005: 35, Le Nouvel observateur）。この市のある中学校の教師によれば、80%の生徒がフランス語を話せない両親に育てられており、高校進学率は全国平均を30%下回る、50%弱でしかない（10-16/11/2005: 33, Le Nouvel observateur）。若年層の失業率は、男子の場合、中卒以下で44.4%、職業適性証所持者が23.7%、バカロレア所持者が15.1%、大卒以上で11.5%と、学歴に応じて減る傾向があるので（朝日新聞 2006/4/6）、この都市の若者の多くは生活条件の改善を期待することすらできない状況にある。また、たとえ苦勞して高校や大学を終えたとしても、若者の80%が就職時や職場で名前や居住地による人種差別があると明言しているのである<sup>20)</sup>（Tribalat 1995: 179）。

こうした都市近郊の状況を改善するために、政府や地方機関は上に見たようなさまざまな努力を払ってきた。その結果、ある調査によれば、マグレブ出身の両親から生まれたシテに住む若者の71%が両親のそれよりフランス文化に親近性を持ち、73%が非マグレブの異性と性交渉をもったことがあると答えるなど、統合のための政策は意識の上では成功を取めている（2-6/12/1993:6 Le Nouvel observateur）。ところが、せっかく左派政権のもとで実施された統合に向けての政策も、右派の政権が誕生すると取り消されて、警察による管理と取締りが前面に出るなど、都市郊外の住人たちは1980年以降のフランスの政争に翻弄されてきた（Vidal 2005b）。

政策を実現する者にとっては、支持者の関心に応えるための単なる政策の変更にすぎないかもしれないが、それによって人生設計を左右され、いったん開いたと思われた社会への扉が閉ざされるのを目にした若者が多数存在するのである。このような政策の不安定さと、「生粋」フランス人に比して3倍の失業の高さ、そして学校や就職における根強い差別や、かれらの存在そのものを否定するような言説が流通していること（この点は後で見る）、さらには学歴をもたず、フランス社会のなかで周辺化されてきた両親の世代との断絶意識は、若者の多くに強い無力感や閉塞感を生んできた。

かれらをめぐっては多くの研究がなされているが、それらはいずれも、かれらがきわめて鋭敏な社会意識や自己認識をもっているにもかかわらず、学歴等をもたないために社会的上昇のルートから外れていること、そしてかれらを排除するフランス社会

に対する深い絶望感を持ち、怒りや憎しみ、絶望感といったかたちで感情を爆発させやすいことを示している。また、教育水準が低く、フランス社会に統合されていない両親に対する尊敬の念をもてないことや、周囲の世界から切り離されているために、達成感や明確な人生設計をもてないでいることも共通して指摘されているものである (Dubet 1987; Lepoutre 1997; Bourdieu dir. 1993)。かれらが置かれている状況を形容するのに、「流刑地区」(Dubet et Lapeyronnie 1992) や「ガレール (苦役船)」(Dubet 1987), 「ゲッター」(Viellard-Baron 1991), 「新・危険な階級」(Beaud et Pialoux 2003) などのことばが常套句として用いられるほど、かれらは他から切り離された世界に押し込められてきたのである。

社会からの疎外感や人生設計の困難に苦しんでいるのは、もちろん男子だけではない。というより、移民第2世代の少女たちこそ、社会からの疎外と、家族とその文化からの圧力に苦しんできたのである。その多くがシテに住む移民の第1世代は、70年以前にフランスに入国しているので、高齢に達していることもあり、その関心は主として年金や社会保障にある。フランス社会から疎外され、疎外されるがゆえに故国との結びつきを重視してきたかれらの意識は、フランス社会に向かわず、生活の安定と家族の名誉のみに向かう傾向がある。その結果、かれらの関心はもっぱら家族や親族に向けられ、女子に対する圧力としてあらわれがちである。かれらは、とりわけその意を汲んだ「兄たち (grands frères)」は、自分の姉妹の行動を監視し、夜遊びや男友達と連れ立っているようなことがあれば暴力に訴えることも躊躇しない。

彼女たちに対する両親や周囲の圧力がいかに強いかは、個人主義と自由を尊重するフランスで教育を受け、フランス市民として育ってきたはずの彼女たちの過半数が、今日もなお、マグレブで生まれ育った青年と結婚させられているという数字に示されている (Tribalat 1995: 31)。彼女たちのあいだでは、自殺や精神疾患を病む割合が異常に高いことが報告されているが、それほど彼女たちは精神的な圧迫のもとに置かれてきたのである (Khosrokhavar 1997)。

1989年以來フランス全土を揺るがした少女たちの宗教スカーフの事件は、このような文脈で理解されなくてはならない。この事件に対しては、「進歩派」や「人権擁護派」を自認する知識人からも、「伝統への回帰」であるとか、「集団性への逃避」であるとか、あるいは「周囲の強制による犠牲者」であるとか、さまざまな言説が与えられてきた (Helvic éd. 2004)。しかしながら、彼女たちの声に直接耳を傾けてきた研究者の多くは、彼女たちがみずからの自由意思で、公共の場でスカーフをかぶることを選択していることを明らかにしている。それは、彼女たちを排除しつづけるフラン

ス社会に対する抗議であり、いささかも彼女たちを理解しようとせず、圧力だけを掛けつづける周囲の世界に対する絶望の表現でもある。彼女たちは「敬虔なムスリム」のヴェールをまとうことで、より多くの自由を獲得できると考えているのである<sup>21)</sup> (Gaspard et Khosrokhavar 1995; Khosrokhavar 1997)。

全体社会への通路を断ち切られた状況のもとで、多様な文化的背景をもつ人びとが、隣人関係もないままに混在し、しかも人種差別と排斥が増すばかりの都市郊外の状況のなかでは<sup>22)</sup>、男子の場合には、怒ること、暴力への傾斜がかれらの自己定義と自己表現の一部になりつつある。また、女子の場合には、仮面をかぶることやスカーフで顔を覆うことが、逆説的ではあるが、他とのコミュニケーションの媒体になっている。

社会との安定した回路を断たれた彼／女らは、ときに暴力行為に走り、ときに宗教スカーフをかぶることで、自分たちの存在を示そうとしている。1982年以來、ほとんど毎年のようにフランスのどこかの都市で暴動が生じており、2000年以降は毎年2万台以上の車が燃やされ、百以上の公共施設が破壊されているという事実も (Bauer et Raufur 2005: 35)、かれらの身体を賭した表現として理解するべきであろう。彼／女らは、警察や軍隊や教育機関による一方的な管理や封じ込めの対象とされており、彼／女らについては多くのことが語られているが、社会とのつながりを欠くがゆえに社会化された語りになりにくい彼／女らのことばには、ほとんど耳を傾けられてこなかったのである。



写真3 フランス国旗をスカーフとして着用することで排除に抗議する女子学生

#### 4 文化の名による統合の試みと排除

とはいえ、都市郊外とそこに住む若者たちを否定的にのみ形容するのは過ちである。かれらのうちのある者（とくに少女たち）は、学校と就業という回路を通じてフランス社会のなかに自分の場を見出す努力を重ねてきたし<sup>23)</sup> (Dubet 1987: 331)、別のある者は、さまざまなかたちで声を上げつづけ、社会との接点をつくり出すために各種の運動を組織してきた。この種の運動が活発になったのは、とくに1980年代であった。なかでも83年には、フランス第3の都市であるリヨンで人種差別の撤廃を主張する「平等のための行進」が組織され、フランスの各地からパリに向かう行進が実現された。

リヨンはフランス随一の工業都市であり、その東部と南部にはシテが広がっている。そのひとつであるマンゲット団地は、大型車を盗んで乗りまわし、最後に破壊する「ロデオ」と呼ばれる今日のフランスでは日常化した行為が最初に（1981年）おこなわれた場所であった。この1981年は、戦後初めて社会党の大統領が選出された年であり、それまでフランス人にのみ限られていた団体結成の権利が移民とその子弟にも開かれるなど<sup>24)</sup>、移民の第2世代のあいだでは開放的な雰囲気広がっていた (Jazouli 1992: 44)。

他方、社会党政権の誕生に危機意識をもった極右勢力は人種差別的暴力をくりかえしており、1983年にはマンゲット団地の反人種差別活動家の若者が警官に発砲されて負傷するという事件も生じていた。この活動家は、こうした事件の多発する都市郊外を世論に訴えるべく、カトリック司祭や教師の協力を得て、「平等のための行進」<sup>25)</sup>を全国規模でおこなうことを決意した。同年10月に、40人の若者がマルセイユを出発したその行進は、各地で人権活動家やカトリック教会の支援を受けながら行進をつづけ、12月にパリに到着したときには10万人以上が集会に加わり、大統領官邸に迎えられるほど、広範な支持を得たのである (Jazouli 1992: 51-68)。

しかしこの行進は、特別な組織をもたない若者グループが手探りではじめたものであり、行進が終わると参加者は四散して、持続的な運動へと展開することはできなかった。翌84年、翌々年の85年と、別なかたちで行進はつづけられたが、最終的には完全な失敗に終わった。40人の若者がはじめた行進が、マルセイユからパリまでを歩き通し、しかもその途上で各地の団体と交流しつつその数を増大させたという事実が示すように、かれらの行動を支えたのは、フランス各地に誕生していた人権問題



に関心をもつグループであった。これらのグループの多くは、非宗教的な性格を持ち、人格の尊重とモラルの確立をうたい、すべての人間の権利の保障と自分たちの社会的な承認を求めていた点で、社会的であると同時に文化的な運動体であった (Wihtol de Wenden 1997: 53)。

しかしそれらの多くは、人種差別の撤廃と「差異への権利」を求めて行進を組織した若者グループと同様、労働組合等の既存の社会運動体と結びつくことができないままに終わった。他者からの承認を通じてのアイデンティティの確立を求めるかれらの文化的志向性と、賃金の上昇や社会保障の拡充などの社会的課題を優先させる社会運動体とのあいだには、有機的な連帯を打ち立てる上で乗り越えられない断絶が存在したのである。その参加者の一部は、社会党などに吸収されることでSOS ラシズムなどの全国的な運動体へと転化したが、そのことによって若者たちの日常からは離れ、社会的力を喪失していった (Wihtol de Wenden 1997: 57)。

移民第2世代の若者の願望が、他からの承認を通してのアイデンティティ構築とモラルの確立であったとすれば、社会的資源の再配分を重視する既存の社会運動論の枠内にはおさまらないのは必然であった。フランスでは、著名な社会学者アラン・トゥレーヌの研究室から、階級闘争を含む社会的敵対を通じて運動の主体としての自己構築を重視する「行為の社会学」派が生まれ、多くの研究者が輩出している (トゥレーヌ 1978)。そこからは、現代の社会運動が富の配分より、「生の諸形式の文法」



写真4 街の壁に描かれたグラフィ

(Habermas 1981: 33) をめぐっておこなわれているとするアルベルト・メルッチらの「新しい社会運動」も生じていたのだが(メルッチ 1997), 既存の社会関係から排除されているがゆえに, 自己と自他関係の根本的なつくり変えを希求していたかれら若者の行動には, 社会運動論の直接の適用は不可能であった。

トゥレーヌの研究室から出た社会学者フランソワ・デュベは, 郊外の若者たちの絶望と希望を描いて疑いなくもっともすぐれた書である『ガレール (苦役船)』のなかで, 社会運動論の限界をにじませながらつぎのように書いている。シテの若者たちが向かうのは, 周囲の社会ではなくかれら自身であり, 自己について語るための新しい言語の創出こそが, かれらの行為がめざすところだというのである。

最終的に, 行為の賭け金は間違いなく文化的なものである。重要なのは, 経済的な平等でもなく, 政治的な自由でもなく, 自律的な行為者として存在することの能力そのものなのだ。数年前には, この賭け金は自己管理と呼ばれていた。しかし今や問題なのは, 固有の人生の自己管理, 主体性の自己決定なのである (Dubet 1987: 321)。

このように行為の「賭け金」が他からの承認と自己決定力の確立であるとすれば, 新しい文化諸形態の創出こそがその王道であろう。激しい勢いでことばを音楽に乗せていくラップや, 都市の壁を文字や絵で埋め尽くすグラフィ, さらにブレイクダンスや演劇, 小説, 映画など, この20年あまりにフランスで実現されたもっとも革新的な文化要素の多くは, かれらによって生み出されてきた (Bazin 1995; Calio 1998; Kokoreff 1999)。かれらは, 一昔前のように, マスコミを通じて流される有名なアーティストやグループの演奏をカバーしたり, 描き方を模倣したりするわけではない。かれらに固有な「周辺化の経験を自分のことばで語る」こと, そしてそれを通じて「主体性を肯定する」ことこそが, かれらがこれらの活動を通じて求めているものなのである (Dubet 1987: 319)。

かれらが具体的にどのような活動をおこない, そこにはいかなるメッセージが込められているのか。かれらのうちでも, もっともメッセージ性の高い活動をおこなってきたのは, 疑いなくラッパーたちである。ほぼ全員が郊外のシテの出身であるかれらは, 都市近郊に住む人びとの夢や失意や生き様を歌い, 他に表現手段のないかれらの代弁者であろうとしてきた。最初にとりあげるのは, マルセイユのシテで育ったラップ・グループ, IAM である。大手レーベルから出た最初のアльバムのひとつで, リーダーであるアケナトンはつぎのように自分の半生を唄っている。

磁石

オレの人生が始まったのは, ゴキブリが床の下を這いまわる／麻薬中毒ばかりが住む地区



のゴミ箱のなかだった／(ヤアヤア、元気カイ?) 連中がお前の新品の車を見たなら、口では誉めても、スキさえあればオカマを掘るだろう／そんなヤツらが住む地区だ  
クソッ、デタラメばかりだ／10のガキのときに、オレはもう盗みで金を稼ぐことを口にしていた／お前もわかるだろう、ここは／ヘロインの売人や銀行強盗の銅像が建つただひとつの地区だってことが

壁にはたいしたグラフィックなど描かれてなくて／小便と取り締まりの跡と、卑猥な文句があるばかり／13のときにはアニキたちと路上で／パイプやカッターを振り回して喧嘩を始めていた

なんとかしてここから出ていこうとしたさ／肩にタオルをかけて、ビーチで女の子に声をかけてみた／おれがどこに住んでいるか聞かれたので／「この近くさ、そこに見えるヴィラだよ」と答えたら／「ごめんなさい、人が泳ぎに行っているあだに盗みに入るのは／あなたの地区の連中よね」／すっかりバレてたわけで、ここまで来ても／地区のクソッタレがオレについて回るのだ

あいつらに見せてやるために、盗まなくてはならなかった／Tシャツやバッグやスカーフを、両手にいっぱい持ってった／シテではなく、ビーチにいる時さえ／窒息しそうなほど地区がオレに付きまとう、磁石のように……

いうことはそれだけだ、オレは自分を許すつもりはない／しっくい削って、ヤクだといって売ったこともあったし／バッテリー液を売ったこともあった、まったく冗談だぜ／こんな話を聞いても笑わないんなら、お前には関係なかったってことさ

夏の夜になると／おれはスーパーの屋上に空を眺めに行った／なぜかはわからないが突然泣きたくなくて／目を両手で覆ってた、クソッ／17の誕生日には、ロバのように茫然としてた、4年間だ／4年たっても、おなじことしか考えてなくて／おなじ悪さと、おなじクソッタレだ／そいつは磁石のように、どこへ行ってもオレに付きまとうのだ

そうだ、オレはそこから出て行った／戻ってみると、嬉しいことに家族やダチはそのままだった／おれは戻り、弟が出て行った／親父やお袋は猶予が欲しかったんだろう

家の外に出てみれば、あいかわらず壁には梁が何本も剥き出しのままだった／ヤア、アンタら、あい変わらずセッセと働いてるね／なにが欲しいんだい、カラーテレビかい?／ヤツらが一か月かかって稼ぐ金を、オレは一日で稼いでいた

お前ら聞いてくれよ、ヤバい商売は／いとも簡単に金や災厄を運んでくる／おれは別の道を選んだ、音楽ってやつだ／ダチのフランソワと一緒にレコードを作ったのさ……」(『光と影』1991年)

アケナトンの半生記でもあろうこの歌には、シテの若者たちの多くがたどる生活や行動のパターンが描かれている。マリファナ、コカイン、喧嘩、密売、盗み、投獄。たとえ学業を終えたとしても失業が待ち受けているだけだとすれば、若者たちに選択の余地はない。すばしこい連中は、近所のワルの手伝いからはじめて、不法行為を積み重ねるだろう。ディーラーと呼ばれる地区のワルたちは、不法行為で手に入れた金でベンツやポルシェの新車を買ひ、女の子を引きつけて乗り回すだろう<sup>26)</sup>。銀行強盗や麻薬の売人であったとしても、金を稼いだ者が勝ちの世界が、シテの若者の傍には広がっているのである。上の歌にもあるように、労働者が一ヶ月働いて稼ぐ金をかれ

らが一日で稼いでしまうとすれば、誰が辛気臭い仕事につくことを望むだろう。そういう世界を見て育った若者たちに、なにを支えに生きていけと語りかければよいのだろう。

シテで生まれた若者たちの夢と悲惨を歌う別のグループに、パリ近郊のオーヴェルヴィリエ出身のNTMがある。より絶望的なパリ郊外の状況を反映して、かれらのメッセージはより攻撃的である。

なにを待ってんだ？

こんなことが、あとどれだけ続くんだ？ もう何年も前に、止めなくてはならなかったことなのに／……アンタらは戦争がはじまることを望んでた、ほら、戦争がはじまりそうだぜ／火をつけるのに、オレらはなにを待ってんだ？ ゲームを止めるのに、いったいなにを待ってんだ？／どこに目標があるんだ？ 誰がモデルになるっていうんだ？／すべての若者の翼をアンタらは燃やしておいて／夢をつぶし、希望の樹液をぜんぶ涸らしておいて……」（『爆弾の下のパリ』1995年）

フランス社会が全体的に右傾化し、移民とその第2世代に対する言論と肉体の暴力が増加するにつれ、ラッパーたちのメッセージも激しさを増していった。とくに2番目に挙げたNTMは、フランス南部のトゥーロン市で国民戦線の市長が誕生したことに抗議して開いたSOSラシズム主催のコンサートで、警察を公共の場で侮辱し暴動を扇動したとの罪で、3ヶ月の投獄と6ヶ月の国内の活動禁止を宣告されたほどであった（23-29/11/1996 Le Point, Boucher 1998: 209-212）。ラッパーたちの告発は日常的小おこなわれており、2005年10-11月の騒乱のあとには、ラップこそが騒乱をおおった元凶だとして、200名を超える国会議員がいくつかのラップ・グループの活動禁止を提訴したほど、ラップは「良識ある」フランス人から目の敵にされてきたのである。

先のNTMは、都市郊外の若者たちの「リーダーではなく、代弁者」だと歌っているが（森千香子 2006: 113）、かれらが発することばは若者たちの心情にもっとも近いものであろう。実際、フランスの有力紙のひとつである『リベラシオン』は、2005年の騒乱の最中に特集を組み、多くのラッパーが何年も前からあのような事態が生じるであろうことを警告していたことを明らかにしている（14/11/2005 Libération）。フランスの国土の一部でありながら、「その住人でなければ、誰も行こうとしない遠くの郊外」（Bauer et Raufer 2005: 13）とさえいわれる土地に押し込められてきた若者たちは、「夢をつぶ」され、「翼を燃や」されてきた。誰もがかれらのことばに耳を傾けず、誰もがかれらの存在を無視してきたなかで、ラッパーたちこそがかれらの存在を



写真5 パリ北部のアダワ・モスク

伝え、かれらのわずかの希望と多くの絶望を証言してきたのである。

もちろんラップ・ミュージックだけが、都市郊外の若者たちの文化活動であるわけではない。フランスのもっとも有力な移民研究誌である『人間と移民 (Hommes & migrations)』誌は、移民の子弟たちによる（およびかれらについての）絵画、小説、演劇、音楽、ダンス、映画など、さまざまな文化活動について毎号かなりのページを割いている。また、郊外の市町村の多くも、かれらを理解し、統合するための手段として、これらの活動の支援に多くの資金を投入している。若者たちが主体的に行動できる領域を確保すること、それを通じてかれらとのコミュニケーションの回路を確保することが、社会から離反する傾向のあるかれらをフランス社会につなぎとめるほぼ唯一の手段だと考えているためであろう。

そうした試みがなされている一方では、かれらを排除しつづけるフランス社会に絶望して、イスラームに自己確認の手段を求める若者が増えていることが報告されている<sup>27)</sup> (Kepel 1991; Babès 1996; Khosrokhavar 1997; Cesari 1998; 浪岡 2004, 2005)。これらの報告によれば、かれらは両親のような集団への「帰属」を強調するイスラームではなく<sup>28)</sup>、個々人の内面的な「信仰」を基礎としたイスラームを受容し、少人数のグループでの勉強会を重ねるなどして、生の支えと誇りの対象を見いだそうと努めている。そして、こうした若者のあいだでのイスラームの伸張が、テロや行動主義と一連の暴動の温床になっているのではないかと、「生粋」のフランス人の側からの一層の疑惑と排除意識を招いているのである。

主体性の確立と他からの承認を求めて、都市郊外に住む若者たちがおこなってきた文化的実践は、ラップ・ミュージックの創造であれ、イスラームの傾斜であれ、マジョリティの側からは文化的差異の象徴と見なされて、徹底して無視されるか危険なものとして排除されてきたのである<sup>29)</sup>。

## 5 フランス共和制と文化

ここで、2005年秋の騒乱に際して、いかなる言説がマスコミ等を通じて流布されていたのか、それを支える論理がいかなるものであり、それによって若者たちの排除がどのように正当化されていたのかを見ていくことにしよう。この検討は必要なものである。というのも、それによってマジョリティの側での若者たちに対する見方が形成されているだけでなく、若者たちの自己意識の形成そのものがそれによって困難に立たされているのだからである。

約3週間つづいた騒乱に際し、シラク大統領が沈黙を守っていたのに対し、嬉々としてマスコミに登場していたのが国民戦線のジャン＝マリー・ルペンであった。フランスが抱える悪のすべてが移民とその子弟に由来すると信じるかれにとって、事件はまさに格好のキャンペー材料になっていたのである。しかし、ルペン以上に稚拙な見解を陳述して苦笑を買っていたのが、ロシア史の権威であり、アカデミー・フランセーズ会員というフランス知識界最高の名誉を受けているエレヌ・カレル・ダンコス女史であった。

かれらはアフリカの都市からまっすぐに来たのですよ。パリやヨーロッパの都市はアフリカの都市ではないのね。……御覧なさい。だれもが驚いているではありませんか。なぜアフリカの子供たちはそこに〔街頭に〕いて、学校に行っていないのでしょうか。原因ははっきりしています。かれらは一夫多妻なので、アパートには4人の妻がいるし、子どもときたら25人もいるのですよ (20-26/11/2005: 27, *L'intelligent, Jeune afrique*, [ ] 内は竹沢, 以下同じ)。

要するに、フランス文化に同化できない「一夫多妻」で「野蛮」なアフリカ出身者とその子弟が、事件を引き起こした首謀者だというのである。こうした主張は、フランスはフランス文化を受肉した「フランス人」のための国なのだから、それに同化不可能ないし同化を望まない移民とその子弟たちは国外に出て行くべきだと論じる国民戦線の主張と軌を一にしたものであった。後者は以前からつぎのように発言していたが、それはこの事件に際してもテレビ等でくりかえされていたのである。「同じ国土



写真6 市場ではナツメヤシの実など多くのマグレブ原産の品が売られている

に、異なる文明をもった複数の共同体を存在させようとするのは悲劇的錯覚である。最大の対立は、人種的対立ではなく、信仰と文化の対立なのだ」(フィンケルクロート 1988: 118 に引用)。20 世紀末の政治的潮流としての多文化主義も複数文化の共存も理解しない粗野な発言だが、その粗野さこそが一定の政治的効果を生み出していたのである<sup>30)</sup>。

一方、68 年の学生運動の指導者のひとりであり、ユダヤ人として人種差別に反対し、リベラル左派を自称していた思想家アラン・フィンケルクロートも、極右政治家に近い発言をおこなって左翼の側からの反発を招いていた。

それらは〔2005 年秋の騒乱は〕社会的次元に還元され、失業と排除に対する若者の反抗だとみなされてきました。しかし問題は、その大部分が黒人やアラブ人であり、ムスリムとしてのアイデンティティをもっているということです。……ここで問題になっているのが、エスニック宗教的な性格の反抗であることは明らかなのです (17/11/2005 Libération)。

以上の発言の意図がどこにあるかは明らかであろう。これらの発言は、フランス国籍をもつフランス人を二分し、フランス文化を保持する「生粋」のフランス人と、アフリカ系やムスリム系の「偽り」ないし「有色」のフランス人とを峻別しようとする。その上で、一連の騒動を後者に帰すことで、前者がおこなってきた差別や排除には目をつぶり、かれらの文化とアイデンティティを無垢のものとして救出しようとしているのである。

もっとも、先に見た国民戦線とフィンケルクロートのあいだには若干の相違がある



ので、ここでフランスの移民政策の変化と関係づけながら説明しておこう。先にも述べたように、移民の問題がフランス全体にかかわる政治問題としてクローズアップされたのは、1974年の大統領選挙以降であった（注17参照）。そしてこの時点までは、移民がフランス語とフランス文化を受け入れることで他のフランス人と同じように行動することが、すなわちフランス文化に「同化」(l'assimilation) することが、当然視されていた。国民国家の建設と円滑な運営のためには国民統合ないし文化統合が不可欠だとする、カール・シュミット以来の古典的な政治理論が生きていたのであり（シュミット1974）、それをそのまま反復していたのが極右勢力だったのである。

しかし、1981年に社会党政権が誕生すると、結社の自由化やラジオ放送の自由化といった政策のリベラル化とともに、人権意識が高まり、移民政策にも変化が見られた。とりわけ1980年代初期には、「差異への権利」を主張するマグレブ系の若者たちの行進が広い支持を受けたこともあり、「参加」(l'insertion) が移民政策の新しい柱とされた。これは、アングロサクソン系の多文化主義に呼応するものであり、それぞれの集団が文化的特性を維持しながら、フランス国家の枠のなかで緩やかに連帯することをめざすものであった（HCI 1991; 中野 1996）。

しかし、この試みはマジョリティの側からの強い反発を招いただけでなく、フランスが国是とする共和国の原則にも反するとして厳しい批判にあった。フランスは1789年の大革命以来、4度の革命を経た唯一の国家であり、その過程で中間団体を徹底して排除してきた<sup>31)</sup>。憲法が「一にして不可分の共和国」と規定していることが示すように、フランスは等しい資格をもつ諸個人からなる共和国とされ、個人と国家のあいだにかなる中間団体の存在も認めていない。国勢調査においても、個別的集団の形成を招くことを恐れて、出自や宗教、人種等を問う項目は一切存在しないのであり、そうしたフランス共和主義の原則に反するのではないかという批判である。

その結果、1990年代になって再選出された社会党政権は、高等統合評議会（HCI, Le Haut Conseil de l'Intégration）を立ち上げ、フランスの移民政策の再定式化につとめた。そして、そこで打ち出されたのが「統合」(l'intégration) の原則であった。ここで「統合」とは、「同化」と「参加」の二律背反を止揚するものとして位置づけられており、各国民は私的領域においてはそれぞれの文化と宗教の自由を保障されながらも、公の場においてはそれを明示しないこと、「単一不可分の共和制」という国是にしたがって自己と他者を等しい資格をもつ一市民として尊重した上で、共和国建設に邁進することが期待されているのである（HCI 1991; Schnapper 1994）。

かくしてフランスの移民政策の根幹をなす「統合」とは、アングロサクソン流の多

文化主義を踏まえた上で、それを乗り越えるべく提出された政治的理念である<sup>32)</sup>。私はこの「統合」の理念は、アングロサクソン流の多文化主義がある種の限界性を示している昨今の状況において、一定の有効性をもっているのではないかと考えている。政治的な文脈における多文化主義ないしマルチカルチュラリズムとは、その旗手チャールズ・テイラーがいうように、「我々のアイデンティティは一部には、他人による承認……によって形作られる」(ガットマン編 1996: 38) ことを前提とした上で、それを政治の場で保証することを求めるものである。

差異をめぐる政治の場合においても、普遍的な潜在的能力というものがその基礎にあるとあってよいだろう。すなわち、個人として、そしてまたひとつの文化として、自らのアイデンティティを形成し、定義づける潜在的能力である。この潜在的能力が、すべての人において尊重されなければならない。しかし少なくとも文化間関係の脈絡においては、近年、より強い要求が生じるに至った。すなわち、現実に生じた諸文化に対して、人は平等な尊重を与えるべきであるという要求である(ガットマン編 1996: 59)。

この観点からテイラーは、各集団が有する文化の存続と尊重を保証するために、政府が積極的に介入していくことを求めている。各個別文化の担い手に対する就学や就業におけるアファーマティブ・アクションの実施に加え、学校教育や各種の文化政策を通じて、個別文化の存続を政治的に保証していくべきだというのである。

テイラーらのマルチカルチュラリズムは、文化とそれを担う集団とを一体視し、各文化コミュニティの自立性を政治的に保証することを積極的に求めている点で、リベラリズムやリパタリアニズムに対抗する、共同体主義の一形態と見なされてきた。しかし、その文化のとらえ方が、内部で同質性を強調し、外部において境界を強化しようとする、人類学や政治学でくり返し批判されてきた文化本質主義的な見方に立っていることは明らかである(注11参照)。そのことに加え、それはコミュニティ概念が抜きがたくもつ限界性を共有しているように思われる。

コミュニティ概念は人類学や社会学でしばしば要請されてきたものであるが、その閉鎖性・排他性に対する批判に答えるべく、より開放的なものへと再概念化されたり(たとえば田辺繁治らが評価する「実践コミュニティ」の概念である、田辺 2005)、その外延を拡大することが試みられてきた(デランティ 2006)。しかし、コミュニティ概念の決定的欠陥は、コミュニティとコミュニティのあいだにどのようにしてコミュニケーションや両立可能性を実現するかを概念化できず、そのためには別の社会的原理を要請しなくてはならない点にある。

かつてマルクス主義の研究者によって、地域的単位=コミュニティが一定の自律性



を有しながらも、帝国の枠のなかに組み込まれて存在するという「アジア的生産様式」が提唱されたように（ホブズボーム 1969; 小谷 1982）、コミュニティは一般に現実の次元でも論理の次元でも真に自律的たりえず、他の社会的原理の地の上でのみ存在する。各文化的コミュニティの自立を支援すべきだとするテイラーらのマルチカルチュラリズムに対し、結局は複数の文化的コミュニティを国家の枠のなかで管理する手段にすぎないという批判が生じているのも、この観点に立てば容易に理解できよう。

このように、複数文化の共存のための政治的理念としてのマルチカルチュラリズムが、各文化集団の境界を強化し、タコ壺的に併存させるという結果を招来させているとすれば、政治の場には各自の文化的出自を出来させず、等しい資格をもつ市民としての相互承認を共和制の基本原則にするというフランス式「統合」モデルは、一定の有効性をもっているのではないだろうか。しかし問題は、その理念が十分に展開され、現実の次元で力を得る以前に、実践のレベルでさまざまな不純物が介在することによって、その力が削がれてきたことである。たとえば、フランスは1871年からの第三共和政において共和制の諸制度の整備を進めたが、それと並行して実施したのが植民地支配の拡張であった。そしてそこにおいて、共和制の理念と現実のあいだの齟齬はこれ以上ないほど開いていたのであり、それが今日までつづいているのである。

フランスの植民地支配の基本理念は「文明化の使命」であり、フランスは世界各地の「劣等民族」<sup>33)</sup> に対し「文明」の恩恵を与えるために植民地を獲得するというのが、表向きの理由であった。フランスは植民地拡張と並行して、フランス国民に選挙権や団結権をはじめとする政治的権利を付与しており、そこで問題になったのが、植民地の住民に対しても同等の権利を与えるかという課題であった。この課題に対し、フランス政府はフランス国内と海外県の住人は市民として遇し、それ以外には「原住民」の地位 (*l'indigénat*) を与えるという二重体制を採用した。後者は参政権や団結権等の権利は与えられないが、徴税や軍役、強制労働の義務は負わされるという点で、「劣等」市民として位置づけられていた。そして、そのような不平等な二重体制を担保するのに用いられたのが、有色の植民地人は知的に「劣等」であり、文化的に「低級」であるのだから、かれらがフランス人と同等のレベルに達するまでは同等の権利付与を与えないでよいというロジックであった（竹沢 2005）。

この二重体制の欺瞞がとりわけ問題になったのは、アルジェリアのケースであった。アルジェリアはフランスの海外県なので、その住人は原則からいえば本国と同等の権利を有するはずである。しかし、アルジェリアに住む人間に関しては、ムスリム

であるかぎり市民権の対象外だとして、市民権の付与は停止された<sup>34)</sup>。カトリックであることは停止の理由にはならないが、ムスリムであることは市民権の不付与の理由となったのである (Blanchard 2005)。こうした政策の基礎にあったのは、宗教と世俗の区別ではなく (ライシテの原則からいえばそうするべきであった)、カトリックは文明的だがイスラームは非文明的だという、宗教ないし文化のあいだに格差をつける自民族中心主義的なロジックであった。普遍性を標榜するフランス共和制は、実際には自文化を絶対視する特殊原則でしかなかったのである。

万人の平等を謳う共和国が植民地支配を実施したことに帰因するこの二重体制は、旧植民地の独立によって終わったわけではなかった。世界大戦後の好景気が必要とした労働力の補強のために、フランスは大量の外国人移民労働者を導入したが、その大半は、アルジェリア、モロッコ、西アフリカ諸国などの旧植民地の住人であった。第二次世界大戦でドイツに占領されながら、ドイツ支配を拒否した海外領土をもっていたおかげで戦勝国になったフランスは、今日にいたるまで過去との断絶を経験したこともなければ、植民地支配の過去を反省したこともない<sup>35)</sup>。そのことを如実に示しているのが、2005年に論議された、「海外、とくに北アフリカで、フランスの存在が果たした積極的な役割」を学校で教えることを義務づけた法律の批准であった<sup>36)</sup>。フランスはこれらの国々の「文明化」の主体であり、これらの国々はフランスによる文明化の客体であったことを、共通の記憶として確立しようとしたのである。

アンダーソンの『想像の共同体』をもち出すまでもなく、集合的な記憶は共同体成立の機縁のひとつである (アンダーソン 1987)。フランスのマジョリティが、「劣等」の諸社会を文明化するのに貢献したという自己規定をもち、それらの社会から来た移民労働者とその子弟が、かれらによって「文明化された」人間の子孫であるとの自己規定を強制されるとすれば、おなじフランス人のあいだにも一級市民と二級市民の区別が導入されることになる。そのような区別が存続するかぎり、後者に対する差別がなくなることはないであろう。いいかえるなら、フランスは本国と植民地に分割していた植民地体制に代えて、内的な植民地をつくり出したわけであり——都市中心部に住む「生粋の」フランス人と、都市周辺部や郊外に住む「貧困」で「色つき」の旧植民地人という分割である——、両者のあいだの差別は法的には消滅したが、実質的には今日まで残りつづけているのである。

フランス共和制とその統合政策が十全に機能するためには、共和制が実現されるべきひとつの理想であることを承認した上で<sup>37)</sup>、その実現のためにマジョリティは自己中心性を改めながら、そしてマイノリティは自分の文化的属性を一旦カッコに入れな

がら、ともに邁進していくという覚悟が必要なはずである。しかし、その努力を怠り、マジョリティが共和制をすでに実現されたものとした上でその側に自己を位置づけ、それ以外の者に対してそれへの同化を一方的に求めたとしたなら、それは自分たちの特殊な制度や文化を絶対化し、それ以外のものを認めようとはしない偏狭な「同化」主義以外のなにものでもない。この「同化」主義は、万人の平等を謳う共和制の原則と両立しないとして否定されたはずだが、現在遂行されているのはそれなのである。

## 6 2005.11 パリ／マルセイユ

私は2005年の秋にパリとマルセイユを訪れた。フランスの各都市でいわゆる騒乱がつづいている時期に訪れたいと希望していたが、新しくはじまった研究プログラムであったために予算の執行が遅れ、日本を発ったのはようやく11月の下旬であった<sup>38)</sup>。パリの国立図書館をはじめとするいくつかの図書館で、新聞・雑誌等を中心に事件に関する資料を集める一方で、一連の騒乱の舞台となった地区を毎日のように歩き回った。パリ北部のサン・ドニ市や南部のエヴリー市、西部のナンテール市など、パリ中心部からメトロや高速鉄道で直接結ばれた地区のシテは、さすがに移民系やその子弟の姿が目につくが、多様な人びとが入り交じって歩いており、それほど緊張感があるわけではなかった。しかし、オーベルヴィリエやアルネー・スーボワなど、一連の騒乱の舞台となった地区に行くと、地区の雰囲気はすっかり変わっていた。

これらの地区は、高速鉄道（RER）や高速道路などに囲まれて外部から隔離されたような土地に、無機質な高層団地が何棟も並んで建てられている。高速鉄道の駅前やバスの停留所の周囲にある商店やカフェは、投石や放火を避けるためかほとんどがシャッターを下げて店じまいしており、道路や広場のあちこちに焼かれた車の残骸が残って、殺伐とした雰囲気を漂わせていた。団地の周囲には商店らしい商店がないので、巨大なスーパーマーケットだけが唯一の買い物場であり、社交場になっている。しかしそれらは、周囲を堅固な壁で囲み、武装した多くの警備員によって守られた、まるで砦のような雰囲気をもっていた。また、団地の付近を歩いても、人っ子ひとり歩いているわけでもなければ、子どもたちの遊ぶ姿が公園に見られるわけでもない。とにかく、人間が住んで、生活を営んでいるという雰囲気がまったく感じられないのである。その一方で、団地の窓という窓からはこちらを窺っているような気配がひしひしと感じられ、いつ何が起きても不思議ではないという不安と猜疑心、そして強制された沈黙が支配しているように感じられたのであった。



写真7 パリ郊外エヴリー市のモスク

一連の事件はテレビや新聞などによって世界中に報道されたが、それらの映像がすべて警備隊の背後からとられたものであることが問題化するなど（重光2006: 150）、シテの住民の多くはマスコミに対して強い不信感を抱いている。不信はおそらく住民どうしのあいだ、住民と行政機関とのあいだにも存在するのであろう。何枚かの写真を撮ったが、隠れて撮らなくてはならないほど、強い緊張を強いられたのであった。一連の事件の直後であったこともあったが、これほどの緊張のなかで生きることが、住人にどれほどのストレスを強いているかは容易に想像することができる。しかもそれが、20年、30年とつづいているのである。

シテから若干離れた土地には必ずといっていいほどモスクが建てられており、信仰の場であると同時に、ある種の社交場になっている。フランスはライシテの原則によって宗教施設への資金援助をおこなわないので、これらのモスクの多くは体育館や集会場を改築したもの、集合住宅のうちの一部を転用したものなど、フランスにおけるイスラームの非公式的な位置を反映したかたちになっている。そのなかでは、南部のエヴリー市などのモスクは、建設時に激しい反対運動が生じたことを忘れさせるほど立派なものであり、町の一角を占めて悠然と塔がそびえている。

あるインタビューでエヴリー市長は、モスクの建設を禁止することでムスリムを非可視化するのではなく、その建設を通じてしかるべき場を提供し、その存在を社会のなかに可視化することの方が、共存のためには効果的だと断言していた（2-8/2006: 11 *Le Nouvel observateur*）。実際、これらのモスクは老人や中年の女性だけでなく、家

族連れや若い男性なども訪れており、緊張どころかむしろ平和の雰囲気があった。そこで何人かに話を聞くことができたが、フランスとイスラームを対立的にしているのは一部政治家の扇動でしかないこと、騒動の時期にもモスクは若者も警察も侵犯しないある種の解放区として機能していたことを、皆が証言していた。モスクは一部の政治家やマスコミがというような緊張と対立の種であるどころか、むしろ地区のなかで生きる人びとにとっては解放の象徴なのである。

郊外にあるシテに向かうには、地下鉄や高速鉄道、バスを乗り継いでいく覚悟がいる。地下鉄や高速鉄道はすべて自動改札になっており、切符を入れると人がひとり通れる設計になっている。ところが郊外の駅ではこのシステムが取り払われて、自由に通行できるようになっているだけでなく、駅員の監視もない。壊されることが目に見えているので、あらかじめ装置をはずしてあるのだろう。ところが、パリの各駅では自動改札の装置が機能しているので、郊外の駅で切符なしで入った人間がパリで改札を通ろうとすれば、たちまち職務質問の対象になってしまう。通行の自由は管理と、中心部への接合は排除と、隣り合わせなのである。

これらの騒動においては、私有物である車に火を付けたところまでは抗議行動として理解できるとしても、郊外のシテの住人を中心部へと接合している公共交通機関に火を付けるのは言語道断だとの見解も、マスコミではしばしば述べられていた。しかし、寒風の吹きすさぶ高速鉄道のホームでパリに向かう列車を待っているとき、私にもその理由がわかったような気がしたものだ。

パリ郊外のシテの多くは、パリの国際空港であるシャルルドゴール空港の近くに位置しており、直線距離にすれば数キロメートルから十数キロメートルしか離れていない。そして高速鉄道はパリと空港を結び、1時間に6本から8本の列車が走っている。しかしその半分以上は、空港とパリの玄関口である北駅をノンストップで結ぶ列車であり、団地のある途中駅には停車しない<sup>39)</sup>。世界中を移動する多国籍企業のビジネスエリートや観光客を載せた列車が目の前を通過していくのを眺めていると、取り残されたような気がしたものだ。かれらは、世界中の都市につながる空港のすぐそばに住んでいながら、そこからは閉め出された上に、それへといたる可能性も塞がれている<sup>40)</sup>。高速鉄道や地下鉄は、形式上は誰に対してでも開かれているが、実際は差別と選別の媒体として機能している。とすれば、それが主要な攻撃目標のひとつとして選ばれた理由も理解できるであろう。

パリにしばらく滞在したのち、私は調査のもうひとつの目的であったマルセイユに向かった。マルセイユは地中海を挟んでアルジェリアやチュニジアに面しており、北



アフリカとの人間と物資の交流のかなめとして、19世紀に急速に発展した海港都市である。19世紀のはじめには人口5千の寒村でしかなかったマルセイユは、1830年以降アルジェリアの植民地化が進行し、さらに1869年にはスエズ運河が開通することで、北アフリカのみならず、中東地域、そしてアジアへの玄関口として急速に発展した。それは19世紀の末までに、人口50万を超える大都市に成長したのである (Medam 1995: 9)。

マルセイユの街は、パリーマルセイユ鉄道の終点であるサンシャルル駅から約2キロメートル南にある港まで、バルスンスと呼ばれる商業地区になっており、北アフリカ向けの電化製品や自動車部品、繊維製品などをあつかう商店や卸店が連なって建っている。この地区は、工業製品から日用雑貨、食料品、麻薬や銃器などの非合法の品々、そして子どもや女にいたるまで、売られていないものはないといわれるほどであり (Tarrus 1999)、フランスのみならずヨーロッパ各国と、北アフリカ・中東地域を結ぶ交易の中心地として、いかがわしさの溢れる活気に満ちている。歩道を歩く人びとのほぼすべては移民系の人びとであり、店の構えも、売っている商品もそうである。この地区は、駅や港といった観光の拠点近くに位置するにもかかわらず、窃盗などが頻繁に起きる地区として警告の対象になっている。実際、私も歩いている最中に背中を引っ張られるような気がしたので振り返ると、若い男がリュックのチャックを開いてなかの品をとろうとしているところであった。多くの人間が道を歩き、商店が連なるなかで、そうした行為が白昼堂々とおこなわれているのである。

マルセイユは、港の東側と南側にはヨーロッパ系の人びとが住む高級住宅地が、そして港の北側には低所得層のための高層団地が何十棟と建てられており、街はふたつに分割されている。人口は、アルジェリアの独立によるフランス人の引き上げがあった1970年代初頭に百万弱でピークになったが、その後は減少して、現在は80万程度である。公称によればムスリム人口は10万前後とされるが、何人かの研究者や活動家から聞いた話では、人口の20パーセントを超えるのは間違いないとのことであった。市内には既存の家屋を再利用した10以上のモスクがあり、市内にあるいくつかの私立の小中学校では、女子生徒のほとんどがスカーフをかぶって通学していることを見ても、ムスリム人口はかなりの数に上るはずである<sup>41)</sup>。

地中海に向けて開かれたマルセイユは、北アフリカからの移住者が最初に踏むフランスの土地であると同時に、かれらの多くはそのままこの土地に住みついた。また、長年つづいたアルジェリアの独立戦争が終了すると、ピエ・ノワール (pieds-noirs) と呼ばれる100万以上のアルジェリアからの引揚者や、アルキ (harki) と呼ばれるア



写真8 マルセイユ市 南から北を望む。港の向こう側にシテが広がっている

ルジェリア人のフランス軍協力者の多くを受け入れた街でもあった (Dewitte 2003)。マルセイユの主要産業はもともと造船業と繊維業であり、おなじく地中海に面したモンペリエなどが石油工業都市として発展したのに対し、産業構造の転換に失敗したために、1980年以降の人口と産業の停滞を経験した。その結果、失業率は14%、貧困層が全人口の23%と、全国平均の2倍近いレベルで高止まりしており (1-6/12/2005: 35 Le Point), 白昼から街をあてどなく歩く人びとの姿が多く見受けられた。

私がマルセイユを訪れたのは、2005年にフランス全土の都市郊外が騒乱状態になったのに対し、この都市ではほとんど車や公共施設への放火も暴力行為も生じなかったためであった。とはいえ、過去にはこの都市でも多くの暴力事件が生じており、とくに1980年代には極右の国民戦線が伸長して、かれらと移民系住人とのあいだで殺人を含めた多くの事件が生じていた (Viard 1984)。南仏の諸都市は、気候が親和的なこともあって北アフリカ系人口の割合が多く、それが地元の人間の疑心暗鬼を生んで、全般的に極右勢力の伸長が顕著である (畑山 1997: 83sq.)。数字的に見ても、郊外の大規模団地の存在や、移民とその第2、第3世代の若者の比率の高さ、失業率の高さなど、騒乱の原因として一般にあげられる要因はすべてそろっている。そうした条件にもかかわらず、2005年秋にマルセイユでほとんど事件が生じなかった理由はなにか。それを明らかにしたいと考えたのである。



何人かに話を聞くことができたので、それを紹介しよう。最初は、市の外郭団体であるマルセイユ・エスペランス（「希望のマルセイユ」）につとめる E. M. さんである。彼女の両親は過去にフランス領であった中央アフリカの出身で、彼女が14歳の時にフランスに移住して、当地で学校教育を受けている。中央アフリカではフランス系の私立学校に通っていたというが、それでもマルセイユに到着したときには、その訛りのせいでしばしば揶揄されたという。それでも勤勉と克己により地元の大学を修了して、市役所に採用されるほどの好成績を収めたのであった。

彼女が勤務するマルセイユ・エスペランスとは、1990年にカトリック大司教とユダヤ教会の大ラビの発案を受けて、ときの市長ロベール・ヴィグラーが設立した組織である。1980年代にはマルセイユを含むフランス南部で国民戦線の台頭がいちじるしく、マルセイユでも1887年、88年と死者を出したほか、マルセイユに中央モスクを建設することの可否をめぐる、フランスをイスラーム共和国にするのかという悪質なキャンペーンが展開されていた（Etienne 2001）。マルセイユ市で醸成されていたそうした葛藤や不穏な空気を鎮静させるべく、市は市内の7つの宗教団体（カトリック、プロテスタント、ロシア正教会、ユダヤ教、アルメリア教会、イスラーム、仏教）の長に呼びかけ、話し合いのための場をつくり出した。その最初の集まりで出された声明は、この会の非政治的な性格を強調すると同時に、各団体の独自性の尊重と相互理解の重要性を高らかに謳っている（Etienne 2001: 173）。

フランスには先にも述べたように徹底した政教分離の原則があるので、市が主催する団体が宗教的な問題に触れることは法律で許されていない。そこでこの会も、宗教的団体の長が集まるにもかかわらず、宗教的な問題や宗教間対話には一切関与せず、世俗的・社会的な問題にかぎって対話をおこなう場として位置づけられている。同様に、法的な位置づけも故意にあいまいなままに放置されており、1901年の結社法に登録しているわけでもなければ、特別な規約が存在するわけでもない。市は数名の職員を派遣しているほか、年に数回おこなわれる討議のための会場を提供し、討論会やコンサート、印刷物などの費用を負担するだけで、恒常的な予算は計上していないのである。

マルセイユ・エスペランスが最初に市民の前で大きな存在を示したのは、1991年の湾岸戦争の勃発に際してであった。戦争が招来させかねない反アラブ攻撃や人種差別を予防すべく、この組織は広くマルセイユ市民に対して平穏を呼び掛ける声明を出した<sup>42)</sup>。また、1995年にはコモロ出身の若いラッパーが国民戦線のメンバーによって殺害され、翌々年には非移民系の柔道家がマグレブ系青年に殺害されるという人種



写真9 マルセイユの中心部の旧港。「マルセイユにはつねに太陽があり海がある」

差別に起因する殺人事件があいついで生じたが、その直後に市民に対して平静さを保つこと、報復行為には出ないことを求めている (Etienne 2001: 175; 浪岡 2003)。近年では、2001年9月のニューヨーク貿易センタービルの爆破や、イラク戦争の開始時にも声明を出したし、2005年10-11月の騒乱に際しても相互理解と冷静さを求める声明を出すなど、その活動は誕生以来17年を経過した今日も着実に継続されている。

いかなる法的根拠もないこの組織が、市民のあいだにどれだけ浸透し、どれだけの影響力をもっているのかを計測することは困難である。しかしながら、私が話を聞いたユダヤ教会、アルメニア教会およびムスリム団体の代表者は、いずれも話し合いの場が存在するという事実そのものを高く評価していた。それぞれの団体の構成員の数は異なっているとしても、各宗教コミュニティに等しい発言の場が保証されているということが、それぞれのコミュニティに属する市民に、他から承認されることの充足と発言の自由の雰囲気を与与しているというのである<sup>43)</sup>。

E. M. さんの話に戻ろう。彼女は14歳の時にマルセイユに移り住んだので、中央アフリカでの生活はよく覚えていないとのことであった。当地では学校はフランス系に通っていたというから、おそらく上層の出身であり、周囲の人びとの生活から切り離された環境にあったのだろう。フランス系の学校は一般に徹底したフランス語教育をおこなうが、理数系はあまり強くないので、中央アフリカの出身でもそれほどハンディ

はなかったと思われる。それに、両親ともカトリックなので、マルセイユに来て教会とそのコミュニティにそのまま吸収されることができたという。フランス人の教会出席率はきわめて低下していることが知られているが、こうした点では教会は今日もなお一定のコミュニティ機能を果たしているのである。彼女はことばの訛りや肌の色による差別を何度か経験したというが、教育も宗教もマジョリティのそれと変わらない彼女にとって、フランス移住はそれほどの文化的衝撃を与えなかったようである。

彼女にマルセイユについての見解を求めると、失業率の高さや貧困、郊外の団地における犯罪件数の増加など、さまざまな問題があるのは事実である。しかし、マルセイユには海があり、明るい太陽があり、アルプスの山にも近いという地の利がある。それで、パリ市のように、長期のバカンスに行ける人間と行けない人間とのあいだの経済格差が深刻化することがない。また、マルセイユはもともとの住人が少なく、各地から人間が寄せ集まってできた街なので、絶対的なマジョリティというものがない<sup>44)</sup>。そのため、人びとの気質が他者に対して開かれていて、排斥が少ない。また、マルセイユは全国でも人口当たりのアソシエーションの数をもっとも多い都市であり、移民系の人びとや若者も、音楽であれスポーツであれ、その他の文化活動であれ、自分を表現する機会が十分に与えられている。街を歩いても、いろんな顔をした人びとが老若男女入り混じって歩いているのがわかるだろう。このようにして若者たちも、街をぶらつき、友人とおしゃべりをし、各種のアソシエーションに参加することで、自分を表現する手段を十分に見つけている。だから、かれらも暴力に訴える必要がなかったのだ、というのである。

E. M. さんは14歳までを中央アフリカで過ごしたという割には、その発音には少しも訛りがなく、きわめて流暢なフランス語を話していた。地元のマルセイユ・プロバンス大学を卒業して市役所に採用されたという経歴をもつだけに、マルセイユ市に対してもマルセイユ・エスペランスに対してもきわめてポジティブな考えをもつ大柄な女性であった。彼女のマルセイユに対する見方がどれだけ市民に支持されるかは疑問の余地があるが、それでもそれが一定の割合の人間に共有されているのは疑いない。実際、プロバンス大学の人類学准教授であるJ. B. 氏に会って話をしたときにも、マルセイユには絶対的なマジョリティが存在しないこと、海があり太陽があるので気晴らしをするのが容易であること、人間の気質がフランスの北部の諸都市より開放的であり、多様な見解をもつ人びとが討議したり、文化の相違を超えて共存することに慣れていることを、2005年秋に暴力事件が生じなかったことの理由として挙げていたのである。

別な人にも話をうかがうことにしよう。マルセイユ・エスペランスの創設にもかかわり、今は市の職員としてリクルートされている S. B. 氏である。かれには数回会って話を聞くことができたので、かれのライフストーリーを含めて、若干くわしく紹介しよう。アルジェリアに生まれたかれが故国を出たのは、凄惨なアルジェリア戦争が終わった 1962 年から間もない 1960 年代末であった。アルジェリアの独立の成功は全土にナショナリズムの高揚をもたらしたが、学生運動を通じて左翼の活動家になっていたかれにとって、そうした故国の政治状況は好ましいものとは映らなかった。石油資源の国有化に象徴されるナショナリズムが、貧富の差や政党の腐敗といったさまざまな社会問題を隠蔽してしまっていたためである。20 歳になったばかりであったかれは、政治理論を学ぶことと、フランスの左翼政党との連帯を模索することを求めて、マルセイユに上陸した。

かれは学業をつづけながら学生運動や労働運動にかかわったが、そのかれが同世代のアルジェリア出身者とともに「発見」したのは、アルジェリアからの移民労働者が劣悪な労働条件や居住環境に置かれていることであった。こうしたことは、かれらにとって思いがけないものであった。というのも、アルジェリアにおいて出稼ぎ者は富の象徴であり、故国では得られない多くの金銭をもって帰国するのが一般的だったためである。かれは仲間の活動家とともに、労働者たちの生活環境の改善を求めて市当局と交渉をする一方で、かれらが労働契約等で不利な条件に置かれることがないように、フランス語の夜間学校を設立し、非正規滞在者の国外追放に対する反対運動を組織した。1970 年代は、フランスの経済不況とともに国外労働者の取り締まりが強化され、非正規滞在者の国外追放が開始された時期であった。同時にそれは、外国人労働者を中心とした居住環境の劣悪さが社会問題となり、大規模団地がフランス各地に建設された時期でもあった。かれとその仲間の活動は、まさに大戦後のフランスの社会的状況やそれに抗する社会運動の流れと密接にリンクしていたのである<sup>45)</sup>。

そうした活動を 10 年あまり継続し、一定の社会的基盤を得ていたかれにとって、1981 年の社会党大統領の選出とそれにつづく放送や結社の自由化の政策はきわめて好ましいものと映った。ただちにかれは仲間とともに、アラブ系だけでなく、アンチール諸島や熱帯アフリカの出身者までを対象とするラジオ局「ラジオ・ガゼル」をつくった。これは、それまで「フランス人」が独占していた公共の場での発言の機会を、マイノリティにまで広げることをめざしたものであり、独自の「声」をもつことは、自己主張のためだけでなく、相互理解とさまざまな文化の共存のためには不可欠だとの意識によっておこなわれたものであった。このラジオ・ガゼルは、広告収入の

ほかに、移民や第2世代の統合のための政府機関である「高等統合評議会」やマルセイユ市などの資金援助によって運営され、今日まで存続している。マルセイユでもっとも好んで聞かれるラジオ局との評判をとるほど「おしゃれな」曲をかけているほか、各コミュニティの集会や文化活動などの情報を流し、80年代には「プールの行進」を支援するなど、さまざまな社会的活動の支持母体としても機能してきたのである<sup>46)</sup>。

そのように、マルセイユに住むアルジェリアだけでなく、外国人労働者一般の代弁者であることをめざしてきたかれにとって、多様な文化的コミュニティの発言の場を保証する組織としてのマルセイユ・エスペランスの形成は好ましいものであった。それは、かれらがつくったラジオ・ガゼルの設置目的と重なるものであったし、それを全市的規模にまで拡大したものであった。左翼の活動家としてやってきたかれにとって、名士的なマルセイユ・エスペランスの活動には微温湯的な部分がある。しかし、生活から運動を立ち上げてきたかれにとって、イデオロギーを優先させたなら多くの市民が離れていくことは明らかであった。それになにより、文化や宗教の名による排除と攻撃を先鋭化させている極右勢力と対抗するためにも、各コミュニティに発言の場を確保することは、自分の存在を保証されているという安心感と他から承認されることの誇りを与えるという利点があった。

かれにとっての移民問題とは、まずなにより第2世代の問題である。というのも、第1世代の人間は、結婚資金や家族の事業資金を貯めるなどの目的で一時的な滞在のつもりでやってきて、そのままフランスにとどまったに過ぎず、そのためフランス社会に同化する意思もなければ国籍を変える意思もない。しかしその子弟たちは、親の故郷のことは皆目知らない一方で、さまざまな差別によってフランス社会から排除され、根無し草の状態に置かれている。かれらの多くは親にならってムスリムだが、いささかも排他的なものではなく、穏健のないし共和主義的なムスリムであり、他のフランス人と十分に共存可能である<sup>47)</sup>。したがって、フランスのマジョリティがオープンにかれらと接し、学業と就職を通じてかれらに社会的場を提供しさえすれば、かれらをフランス社会のなかに受け入れていくことは少しも困難ではない。その意味で、かれらの問題は、多くの識者や右翼系政治家がいうように宗教問題や文化的問題であるより、社会問題として理解されるべきだというのである<sup>48)</sup>。

アルジェリア生まれでありながら、フランスで長年左翼系の社会運動に従事してきたS.B.氏は、かれのアイデンティティの根拠をフランスに置くことはもちろん、民主化を実現することができず、いつまでも内戦をつづけているアルジェリアに置くこ



ともためらいがあるようだった。かれはマルセイユがさまざまな移民から構成された都市として、フランスのなかでは特異なものであること、そしてマルセイユを36年にわたって治めたガストン・デフェール市長以来の伝統として (Peraldi et Samson 2005)、パリに反旗をひるがえして、地中海都市として生きることこそがマルセイユの可能性だと述べていた。イタリアやスペイン、そして地中海を越えてアルジェリアやチュニジア、モロッコ等の諸都市との交流を深めてこそ、マルセイユが独自性をもって存在することが可能になるというのである<sup>49)</sup>。

マルセイユが真にコスモポリタンな都市になることは、アルジェリアで生まれ、おそらくフランスで死ぬであろうかれにとって、もっとも好ましいアイデンティティの形式であり、かれの一生をかけた営為の成果として容認されるものなのだろう。かれによれば、多くの市民やとくに若者のあいだでコスモポリタンな地中海都市としての意識が生まれつつあることが、2005年秋にフランスの各都市であれほどの騒乱状態になったにもかかわらず、マルセイユのシテに住む若者たちがそれから距離を置いた理由だというのである<sup>50)</sup>。

最後に、移民第2世代の若者の声を聞くことにしよう。かれ M. S. 氏は、年齢は20代の前半で、アルジェリア出身の両親からフランスで生まれ、仲間と演劇活動をおこなうことに情熱を傾けている。先のふたりが学校教育を十分に修め、階層や国籍の異なる他者と話すことに慣れているのに対し、若者同士のつきあいが多くであろうかれのフランス語はスラングと逆さことばが多く、必ずしも会話が弾んだわけではなかった。M. S. 氏は、マルセイユには差別が少ないといっていた E. M. さんのことばに反し、かれ自身さまざまな差別の対象になってきたことを明言した。マルセイユ北部のシテに生まれたというだけで、十分にステイグマになっているというのである。しかし、マルセイユだけでなく、フランス全体に差別を生み出す客観的状况がある以上、それを非難してもはじまらない。むしろ、自分たちの経験や生活環境を表現していくための手段や独自の声をもつことこそが、それと闘っていくためには必要だというのである。

さいわい市当局は、各シテに公式非公式に窓口を設け、交渉次第でそれらの活動のための資金を提供してくれるので、練習や本番のための会場費や大道具を作るための資金の大部分は補助金でまかなうことができる。マルセイユのほとんどのシテには、演劇や音楽、スポーツなどのグループがあるので、それらのグループが集まる演劇祭や音楽祭を実施することは絶好の機会である。そこで作品を上演し、他と比較しながら客観化していくことは、自分たちの活動を洗練させていく上で貴重な経験である。



この点で、自発的な文化活動を支援しようとする市の方針は評価されてよいというのである。

『お前が俺よりマルセイユっ子だというなら、お前は死ぬしかない』という題をもつ本が出版されていることが示すように (Moreau et Cesari 2001)、マルセイユ市民は一般に地元に対する愛着が強いとされる (1/12/2005 Le Point)。その点では、かれも他の誰にも劣るものではない。なにしろマルセイユには太陽があり、子どものころから遊んだ海がある。そして地元根差したオリンピア・マルセイユというサッカーチームがあって、試合のときにはスタジアムもスタジアムに向かう街全体も「まるでブラジル」になる。そこでは、市長も経済界のお偉方もシテの若者も、分け隔てなく一緒になって応援するというのである。

マルセイユは、多数の出自、多数の宗教をもつ人間が集まってつくられた街なので、誰もが自分の街だ、自分たちの街だと思えることができる。失業率が高いのは事実だが、大手スーパーが郊外に進出したときにも、市が介入して地元の人間を優先採用させるなど、それなりの努力がおこなわれている。かれの友人の何人かはこれらのスーパーに採用されることで、賃金は低いとしても、安定した収入を得ている<sup>51)</sup>。かれ自身定職がなく、市のアニメーターの仕事や見習い仕事を短期でつないでいるだけだが、演劇を自分の仕事として認識しているので将来を悲観しているわけではないと、おそらく多少の強がりを含めて話していた。

## 7 考察

私がマルセイユでおこなった聞き取り調査の数はかぎられているし、対象者がなんらかのかたちで社会に統合されている人びとなので、かれらの発言がどれだけ一般性を有しているかは明確ではない。とはいえ、比較的幅のある人びとから話を聞くことができたので、以上のような限界を意識しながら、これをもとに考察を進めていきたい。課題は、2005年秋にフランス全土の都市郊外が騒乱状態に陥り、ムスリムに対する非難と告発があいついでなされたなかで、なぜマルセイユはそれと無縁だったのかという問いに答えを求めることである。そして、1で立てた一連の問い、すなわち、国民国家と文化のあいだの関係性、複数の文化の共存可能性、文化概念の再検討などの問いに対し、一定の答えを探していくことである。

マルセイユの特殊性を考えていく上で、第一に注目されるのは、さまざまな宗教コミュニティに対等な発言と対話の場を提供しているマルセイユ・エスペランスの存在

であろう。これはいかなる法的地位ももたず、マルセイユに存在する主要な7つの宗教コミュニティが任意に集まるだけの団体でしかない。しかし他方でそれは、年に数回話しあいの場をもち、緊急時には市民に向けて広く声明を出すことで、人種や文化的差異を理由にした緊張が生じるのを予防する上で、一定の役割を果たしていると思われている (Etienne 2001)。

各宗教コミュニティの代表が集まって協議をし、たがいの文化的差異の尊重と相互の承認をおこなうというこの組織の性格は、いわゆるマルチカルチュラリズムの基本図式に合致している。ところでマルチカルチュラリズムとは、カナダやオーストラリアのように国内に複数の文化集団を抱える移民国家において、一国家＝一文化という古典的な図式に抗って、国民国家を複数の文化の上に基礎づけるべく練り上げられた政治的理念であった。

たしかにそれは、文化的少数派に対して多数派文化への一方的同化を求める偏狭な同化主義に比べれば、よりリベラルな政治的理念であるのは疑いない。しかし、これまでの検討が明らかにしたように、それがいくつかの限界をもっていることも明らかである。それは、文化とそれを担う集団とを一対一対応させることで、個々の文化を境界づけられたものとしてとらえると同時に、文化の内部での同質性を強化する結果に終わっている。かくしてマルチカルチュラリズムとは、1国家＝1文化という図式を逃れるために、国家のなかに文化的主権を有する複数の集団をもち込んだに過ぎない。その結果、文化の境界は強化されたままで、諸文化の相互理解と相互交流をどのように実現していくかという課題は、「承認」というあいまいな倫理的姿勢へとずらされただけである<sup>52)</sup>。

このような「強い」意味でのマルチカルチュラリズム<sup>53)</sup>と比較するなら、上にとりあげたマルセイユ・エスペランスの実践が、それから遠く離れていることは明らかであろう。それは各宗教コミュニティのメンバーに、その境界の再生産のために行動することを求めているし、各コミュニティが存続するためになんらかの政策の遂行を求めるものでもない。そもそもそれは、政策の遂行を求める法的基盤をいささかもっていないのである。

信仰を異にし、考え方の異なるコミュニティを代表する人間が集まって協議し、そこで全員の合意を得た見解だけを全市民に対して発信していくというこの団体の活動のあり方は、文化の共存を可能にする空間として要請されている「公共性」ないし「公共圏」<sup>54)</sup>の概念にむしろ近いものであろう。政治学者齋藤純一は、帰属を優先させ、見解の同一性を強制する「共同体」の対概念として「公共性」をとらえ、価値の

多元性や異質性、離脱可能性、開放性などを基本的特徴とするそれは、「差異を条件とする言説の空間」として定義されている（齋藤 2000: 25-26）。そしてそこにおいては、身体にかかわる事柄から、環境問題やさまざまな紛争にいたるまでの問題や事柄が話し合われることで、合意の形成と社会の未来像の形成とが図られるというのである。

このようなものとして公共圏をとらえるなら、見解を異にする人びとが集い、全員の合意を見た見解のみを外部に向かって発表していくというマルセイユ・エスペランスのあり方は、まさに公共圏を地で行く試みだということができよう。たとえば過去に現市長ジャン＝クロード・ゴードンが、元イスラエル首相でノーベル平和賞の受賞者であるシモン・ペレスを名誉会員として迎えようと試みたことがあった。しかしその提案は、この団体の中立性を損なうものとして拒否されたという（浪岡 2003: 87）。この事例をもってしても、政治的に利用されたり、圧力団体になったりすることを回避しつつ、対話の場を保証しようというこの組織がすぐれて市民的公共圏としての性格を有していることは明らかである。

ただ、こうしたものとしての公共圏が、マルセイユの市民のあいだでどれだけ浸透し、どれだけ統合に寄与しているかという点については、明確な答えがあるわけではない。圧力団体としては機能しないそれは、市民のあいだにどれだけ浸透しているのかが明確ではないのである。実際、私がマルセイユ・プロバンス大学で何人かの研究者と話をしたときにも、かれらの多くはマルセイユ・エスペランスが存在することは知っていたが、その組織や活動内容についてほとんどなにも知っていなかった。

文化が境界づけられて対立させられる傾向があり、公共圏が現実社会においてどれだけ有効かの検証ができないとすれば、私たちはなにをもって異質な文化をもつ人びとの統合を考えればよいのか。私としては、対話をしてくれた数人の人間の発言のうち、くりかえし聞かれたことばに注目したい。それは、マルセイユがさまざまな移民の波からなる街だということであり、子どものころから遊びまわった海と山に近いという地の利であり、街をぶらつくことであれ演劇活動をおこなうことであれ、誰もが自分を表現する場をもっているということであり、そしてマルセイユの人間のオープンな性格であった。自然環境から人間関係、文化活動にいたるこれらのことばをすべて括るには、人類学でしばしば使われてきた文化やコミュニティという語は有効ではない。ローカルな空間性ないしローカリティということばが、おそらくここで援用されなくてはならないのである。

人類学者であるグプタとファーガソンがいうように、空間の概念は人類学では「驚

くほど少ししか自己意識のない」概念である (Gupta and Ferguson 1997: 33)。人類学者がこれまで好んできたのは、社会関係に結びつくコミュニティや構造, 社会組織, 支配, 権力などの語であるか, あるいは文化的なコノテーションをもつアイデンティティ, 他者性, 儀礼, 物語, 生業活動などの語であった。しかし, 社会科学のいわゆる「空間論的転回」を実現したソジャがいうように, 社会関係や生産関係は特定の空間的配置をともなってはじめて現実化するものであり, 空間的配置を抜きにして社会関係を論ずることは困難である (ソジャ 2003)。「空間の生産は, 社会関係と社会的行為の媒体および結果として記述される」ものなのである (Soja 1985: 94)。

社会的事象についていえることは, 文化的事象についてもおなじであろう。儀礼から農業にいたるさまざまな文化的活動は, それぞれの空間を個性あるものとして形成する一方で, 特定の空間的配置のなかではじめて人びとによって実践され, 意味を与えられることができる。これまで人類学が空間に関心を寄せることが少なかったのは, おそらく文化が (少なくともその要素が) 人びとによって持ち運ばれ, 伝達されるものであるがゆえに, 空間との結びつきが少ないと考えられたためであった。しかし, たとえば日本の文化と朝鮮半島のそれとの出会いが, 日本でおこなわれたか半島でおこなわれたかで大きく形態を変えるように, 文化の接触は空間によって違った形態をとりうる。そもそも文化の接触自体, 空間を抜きにしては不可能なのである。

アルジュン・アパデュライは, グローバル化が進行する状況下での文化概念の捉え直しを試みた本<sup>1</sup>のなかで, グローバル化と一見相反するよう見えるローカリティ概念の再構成を求めている。ローカリティということばを, さまざまな文化的実践のおこなわれる「地」としてとらえるのではなく, 文化的実践を通じてローカリティがいかにして生産されているのかを考えることが重要だという。つまり, 世界各地のコミュニティがおこなってきたさまざまな儀礼や農業, 住居建築, 土地所有, 土木工事などの実践を, ローカリティを生産するための一連の技術と見なすべきだというのである (アパデュライ 2004: 9 章)。このローカリティの概念に近いものに, 現代史でいうところの「<sup>テリトリー</sup>領域」(territoire, territory) の概念がある (Fourcaut 2000; フルコー 2004)。これはフランスの都市郊外や周辺地域において, 労働者階層や外国人移民などが, かれらにとって疎遠な空間をどのようにして親密な空間へと作り変えているかを論じるために招聘された概念である。フルコーによれば, 空間は文化的と同時に社会的なものとしての慣習行動によってテリトリーへとつくり変えられるのであり, そのようにして空間をわがものにするによって, 人びとは「固有の都市文化やソシアビリティ [社会的関係性] と抵抗の形態を生み出し」, ある種の「政治的アイデン

ティティをかたちづく」ってきたというのである（フルコー 2004: 217）。

本稿で論じたマルセイユの特異性を考えるのに必要なのは、このような文化化／社会化された空間としてのローカリティやテリトリー概念ではないだろうか。マルセイユはこの2世紀にわたってさまざまな移民の波を受け入れてきたが、それらの人びとはたんにマルセイユを通過するのではなく、この街で労働し、住居を構え、家族を築いてきた。その波はそのままマルセイユを構成するいくつかの街区や商業地区になっており<sup>55)</sup>、それはマルセイユを訪れる／マルセイユから出発する巡回商人の手を経て、地中海世界、熱帯アフリカ、中南米諸国、東欧諸国へとつながる商業と人間のネットワークになっている（Tarrus 1992, 1999）。

かれらのあいだには、民族や宗教の枠を越えてたがいに承認しあうための独自の「名誉のコード」ないし作法が存在するとされるが（Tarrus 1999: 264）、そのかれらの全体を取り込み、対話と共存と利害活動のための場を保証したものこそ、市当局による都市計画の実践であり、「公共空間」としてのマルセイユ・エスペランスの試みであった。また、マルセイユには海があり山があると多くの人間が述べているが、それは人間の活動の外部に広がる無機質な空間なのではない。多くの人間がそこに出かけて行き、泳いだり磯遊びをしたり、絵画や写真に切り取ったりすることによって、マルセイユの人間のアイデンティティの一部になるほど人間化された空間なのである。

住民の側も、「自分たち」のサッカーチームであるオリンピック・マルセイユの応援の仕方や、街の中心にある繁華街を老若男女がぶらつく街の楽しみ方、男性をレジ係に採用する仕事の仕方<sup>56)</sup>などに、独自の形式をつくり出している。さらに、さまざまなアソシエーションをつくることで公式非公式にソシアビリティを設け、音楽や演劇、スポーツを通じて自己を表現し、相互理解と対話を可能にしている。市当局もまた、さまざまな文化をもつ集団が往来し、商業活動等々をおこなうことを可能にするために街区や交通機関を整備するとともに、ストリートや広場、教会等の空間的配置に配慮し、さらに若者たちの音楽や演劇活動に資金を出し、発表のための空間を用意することで、かれらが相互理解と自己承認を獲得するのを援助してきた。アルジェリアの植民地支配や凄惨なアルジェリア戦争、大量のフランス人の引き上げという歴史的な有為転変のなかで、それに翻弄されるのではなく、マルセイユという独特の個性をもつ空間をつくり出し、住民の多くにフランス人である以前に「マルセイユっ子」だとの意識を醸成させてきたのは（Moreau et Cesari 2001）、地中海に面した海港都市という歴史的・経済的条件に根ざした空間的配置のなかでの、これらの多様で複

合的な実践の積み重ねであったはずである。

マルクス主義の政治哲学者ニコラ・プーランツァスがいうように、近代以降の国民国家は、「統一するために分離し分割し、構造化するために断片化し、包括するために原子化し、全体化するために環節化し、均質化するために囲い込」むという、均質化、全体化を徹底しておこなうところに特徴がある（プーランツァス 1984:116, 原文を参照して訳を若干変えてある）。とすれば、人びとがそうした均質化、全体化の試みに抗いつつ、どのようにして国家によって囲い込まれた空間を自分たちのものとするために再編成してきたか、その空間を当地の人間がどのようにして概念化し、またその構造化された空間によって人びとの行動がどのように影響されてきたかを考えることもまた、人類学の課題のひとつとして認められるべきであろう。文化化／社会化された空間としてのローカリティないしテリトリーにおいてこそ、働き、食べ、眠り、交わり、学び、自己表現する存在としての人間、モースのいう「全体的人間 (l'homme total)」(Mauss 1950: 304) が具体化されているのだからである。

もちろんここでローカリティ／テリトリーというからといって、それをナショナルなものやグローバル化に抗する抵抗の拠点として考えているわけではない。ローカルな空間もまた、つねにすでにナショナルなものやグローバルなもの力の編成を受けて構成されているのだからである。とすれば、人間の生活世界と、ナショナルなものやグローバルなものが出会う場としてローカリティ／テリトリーをとらえ、その生産と再生産に働くさまざまな行為者やメカニズムを記述し分析していくことが必要なのではないだろうか。EUは国民国家という制度には手をつけないと定めているが、その一方で、地域的・都市的な活動に対しては支援と資金援助をおこなっている。そうしたなかで、マルセイユだけでなく、バルセロナ、ジェノバ、ミラノを結ぶ地中海諸都市の連携が盛んになっていることが知られているし（ベンハビブ 2006: 150）、これにマグレブ諸国や中東地区との連携を加えることもできるであろう。

フランスへの帰属より、テリトリーとしてのマルセイユを優先させる市民のアイデンティティは、このような地中海を結ぶ都市間の連携によって支えられると同時に、市民の実践の積み重ねのなかから生じているのであろう。そこには、移民の排斥や文化の差異による排除とは異質なある種の解放感が存在するのであり、それは、EUの拡大のなかで排他的な自国文化への引きこもりを見せている国々の事例とは異なるだけでなく、その内閉を内破させていくのではないかという期待さえ抱かせているのである。



## 結 論

本稿では2005年のフランスの諸都市で生じたいわゆる都市暴動をとりあげ、その背景を探ってきた。その背景にあったのは、移民第2世代の若者を学業と就職を通じて社会的に「統合」というフランス式統合モデルが、かれらの文化的差異を強調する右翼政治家や知識人の扇動と、しだいに排他的になりつつあるマジョリティの側の独善によって、機能不全に陥っていることである。貧困や利害の対立といった社会問題は、階級闘争や社会運動を含めた社会的行為者を想定することである程度までは解消に向かうというのが、これまでの社会学的なメタ物語である。しかしながら、諸文化が境界づけられ、対立させられることで生じているさまざまな今日の問題は、それに関わる有能な行為者をいまだ見つけることができないでいる。たしかにシテに押し込まれた若者たちは、新しい文化諸形態を生み出してはきたが、文化の名による排除を超克するにはまだ遠い状態にある。とすれば、境界づけられ、通分不可能なものとしてある文化概念のつくり変え、あるいは複数のそれが出会い、相互浸透を必然とするような場を概念化することが、いま求められているのではないだろうか。

私は別のところで、19世紀フランスにおける「社会」概念の成立について検討している（竹沢2007c）。それによれば、「社会」にせよ「文化」にせよ、19世紀の国民国家の勃興・発展期に西洋において確立され、その後世界中に輸出され、今日にいたるまで私たちの思考と実践を拘束しつづけている概念である。19世紀的な負荷をもつこれらの概念は、国民国家の建設と緊密に連動したものであったがゆえに、人間とその実践をある一定の境界のなかに閉じこめる傾向をもっている。それゆえそれらに代えて、人間の移動が常態となり、資本と情報の流通が所与のものとなっている今日の事態に対応した、人間の実践と思考を枠づけるための新たな概念の創出が必要とされているのであろう。

複数の文化が出会い、たがいに影響しあい、ときにはその一部が融合して新しい文化をつくり出すという動きは、特定の空間でのみ可能になるものである。とすれば、そのような観点から、ローカルで文化的なものとしての空間性を概念化すること、そうした空間性の生産と再生産のメカニズムを記述していくことが、要請されているのではないだろうか。おなじ空間を占有するさまざまな行為者は、さまざまに異なる実践を同一空間のなかに共存させるために、ある種の作法とコードをつくり出していると思われる。異質性と境界性のなかに閉じ込められた文化概念ではなく、多様な行為者

がそれぞれの生を根拠づけている「生の文法」を重ね書きすることによってつくり上げた空間としてのローカリティやテリトリーの概念を提示したのは、そのためであった。

マルセイユ北部の地区での調査中に、私は4人の若者に襲われ、カメラやノート、資料の入ったリュックを奪われた。しかもそれは、大勢の地元の人間や通行人のいる場所で、かれらの目の前でおこなわれたにもかかわらず、誰もそれを止めようとはしなかったのである。窃盗や軽犯罪が日常化し、それを誰もが異常とは見なさないような状況のなかで調査をおこなうことは容易ではないし、本稿の基礎的データの手薄さがそれに起因しているのは疑いない。しかし、今後さらに深く調査を実施していくことで、より豊かなモノグラフの作成と理論的深化をめざしていきたい。

## 注

- 1) 日本語では「移民」と一口にいうが、英語やフランス語では、国外への移住を *emigration*、外国からの国内への移住を *immigration* として区別している。本稿で「移民」と書いた場合、問題にするのは後者のケースである。
- 2) 若干データは古いが、1987-1989年のパキスタン系イギリス人の失業率は25%（白人は9%）、とくに25-44歳の働き盛りのそれは30%（白人は7%）であった（アンクル 2002: 99）。収入に関しても、全国平均以下の所得の人間の割合は、白人28%に対し、パキスタン系82%、バングラディッシュ系84%、アフリカ系39%である（浜口 2000: 141）。
- 3) 日本では「都市暴動」と記すのが一般的だが、フランスでは *révolte* 「反乱」、*soulèvement* 「蜂起」などのいい方もよくされてきた（Autain et al. 2006）。フランスの日刊紙『ルモンド』系列の『ルモンド・ディプロマティック』の2005年12月特集号の論文も、ほとんどがこうした用語を用いている。私は2006年2月に、パリ郊外のナンテール市が主催した討論会「第一回世界郊外サミット」に参加したが、研究者や市役所職員である発表者の多くは「抵抗」「反乱」の語を用いていた。「暴動」と定義することで管理によって対処しようとするのではなく、事件の背景を探り、そこから社会全体で解決策を探っていくとする姿勢が、「抵抗」や「反乱」の語の使用の背景にはある。
- 4) これも「不法滞在者」と書かれるのが一般的であるが、フランスにおける非正規滞在者の研究をしている稲葉奈々子にならって、ここではこのように記す（稲葉 1998, 2004）。正式の滞在許可証や労働許可証をもたないとはいえ、長年にわたって契約下で就業し、税金も払っているかれらを、「不法」として一括するのはあまりに管理者的な発想だと思うからである。
- 5) 1990年代後半以降、反移民を掲げる極右ないし右翼政党が、オーストリア、イタリア、デンマーク、ポルトガル、スペイン、オランダ、そしてフランスで、一時的ないし一貫して政権についている。
- 6) フランスにおける「統合」政策の実態とその歴史的变化については、第5章で論じる。
- 7) 事情はフランスにおいてもおなじであり、フランス国内の移民の問題を論議している研究者は、ほぼすべてが社会学者か政治学者であり、人類学者の関与はきわめてかぎられている。
- 8) この問題をめぐって、2005年3月に国立民族学博物館で、「文化と公共性」と題するシンポジウムがおこなわれた。発題者は竹沢であり、発表者として、タラル・アサド・ニューヨーク市立大学教授、白杵陽日本女子大学教授、大澤真幸京都大学教授の3氏が加わった。このときアサド氏が、フランス共和制と宗教的マイノリティの相克として整理した問題の所在が、私をヨーロッパにおける移民の研究に向かわせた理由であった。
- 9) ライシテは一般に「政教分離」と訳されるが、「私」の領域で信教の自由を認める一方で、「公」の間からは宗教的なものの出現を一切禁止する原則であり、「政教分離」という以上の

強い意味をもっている。宗教スカーフをかぶる女子学生が公教育の場から追放されたのは、公教育とは共和国を支える市民を育成する場なのだから、市民である前に特定宗教の信者であることを主張する人間は、そのまま受け入れるべきではないとの論理によるものであった（よりくわしくは、竹沢他 2007 を参照）。このような措置は、わが国のように宗教に対するゆるやかな態度をとるのが慣習である国家にとっては、あまりに厳しすぎるものと映るかもしれない。しかし、この法律の批准には国会議員の 90% 以上が賛成したし、全国民の 8 割以上（北アフリカ系のムスリム人口においても 8 割近い）の支持を受けているのである。この原則からすれば、どこかの大統領のように聖書に手を置いて宣誓をすることや、どこかの首相のように特定の神社を参拝することは、公人としての資格に対する違反以外のなにものでもない。

- 10) この法律が批准された直後の 2004 年 9 月の新学期に、宗教スカーフをつけて登校した女子学生は全国で 639 名。うち、538 名は学校長や教員の指導によってスカーフを外すことを承諾し、残りの一部は私立学校等に転校した結果、43 名が NGO 団体等の支援を受けて家庭で学習することを選択している（18/12/2004 *Libération*）。フランスにおける私立学校のほとんどはカトリック系の学校であり、そこではムスリムの女子学生はムスリムとして受け入れられている。私がマルセイユで訪れた、ムスリムの集住地区にあるカトリック系の私立学校も、女子学生の半数以上はスカーフを巻いて登校していた。学校関係者に聞いた話では、問題は現代社会があまりに世俗化したことであり、カトリックであれイスラームであれ、宗教的な価値観を尊ぶ意識は分けへだてなく尊重されるべきだとのことであった。一部の極右政治家や知識人がいうような、キリスト教とイスラームの対立はここには存在しないのである。
- 11) アメリカ合衆国やイギリスでは、国勢調査で宗教や人種、民族等を問う項目があり、各自はその枠にしたがって自己規定をおこない、他からもそのようなものとして承認されることが期待されている。一連のアファーマティブ・アクションを実施する上では、このような自己規定は必要なのである。しかし、こうした「多文化主義的」な政策に対しては、文化の境界を固定し、各集団を上から管理しようとする発想だとの批判が根強く存在するの事実である（ターナー 1998; 米山 2003; Young 1990; Benhabib 2002）。この点についてはのちにくわしく検討する。
- 12) 国民戦線の指導者のひとりとは、つぎのように主張している。「移民を援助する、とは、まず第一に彼らをありのままに尊重すること、彼らがみずからの国民的アイデンティティの中で、みずからの文化的特殊性の中で、彼らが根づいた精神的・宗教的環境の中で、こうありたいと望むような姿のまま彼らを尊重することである」（フィンケルクロート 1988: 139 に引用）。移民たちは、かれらが「根づいた精神的・宗教的環境」に戻るべきだというのである。
- 13) 今日、北アフリカや熱帯アフリカの出身者に対する排斥の理由として、かれらのほとんどがムスリムであり、生活習慣が大きく違うことなど、文化的差異が挙げられることが一般的である。しかし、フランスが経済危機に直面した 1880 年代や 1930 年代には、おなじカトリック国であり、ラテン系の言語を喋るベルギー、イタリア、スペイン出身者に対する暴力事件が激発したことを見ても（Temime, 1999: 51, 61; Dewitte 2003: 40sq.）、「文化的差異」の主張はきわめて恣意的なものだといわなくてはならない。文化的差異があるから排斥するのではなく、排斥したいから文化的差異を探し回っているのである。  
 こうしたことは、「高名な」サミュエル・ハンチントンの議論にも見られるものである。かれは、世界がキリスト教圏やイスラーム圏、儒教圏、アフリカ圏、南アジア圏など、10 程度の「文明ブロック」から成り立っているとし、文明間の対話は困難であるから、衝突が起こるのは必然だと説いた（ハンチントン 1998）。その背景にあるのは、文化や文明の差異に対する微細な感性ではなく、個々の人間集団を文化的親縁性によってそれぞれの地域に閉じ込め、その全体を軍事力ないし警察力によって管理しようという管理者的・支配者的な発想でしかない。かれがベトナム戦争時に、コミニスト軍が農村に根拠を置いてゲリラ戦争をするのに手を焼いて、農村人口の都市への強制移住を説いたのとまったくおなじ発想である（Huntington 1968）。もしそのようなことがおこなわれたなら、いかに環境が荒廃し、飢饉の危険が増大することが必至であったとしても、かれには与り知らぬことであったのだ。
- 14) 外国人移民のうち、ポルトガル人移民の 82%、アルジェリア人移民の 75% が、いかなる資格も学業修了証ももたない単純労働者であった。のちにフランスが経済危機を経験すると、真っ先に職を失ったのはかれらであり、北アフリカのマグレブ出身の移民は、「生粋の」

- フランス人に比べて 80% も多く失業の危険にさらされているという調査結果があるほどである (Maurin 1991: 40)。
- 15) アルジェリアやモロッコなどのマグレブ系移民のなかでも、フランスが受け入れてきたのは、マグレブ諸国の少数民族であるカビル人 (ベルベル系) である。フランスはアルジェリアなどのマグレブ諸国の植民地支配に際して、主流であるアラブ人に対抗させるために、ベルベル系の人間を優遇する政策を採った。かれらの優遇を正当化するために、ベルベル人はアラブ人とは異なる人種であり、歴史的にもキリスト教の伝統をもつことを論証しようとして (キリスト教哲学を一新させたアウグスチヌスは、北アフリカのベルベル人であった)、形質人類学や考古学、言語学、民族学等々の知識が総動員されたことさえあった (竹沢 2001: 第 3 章)。この意味で、今日の移民の問題は、海外領土をもっていた他のヨーロッパ諸国と同様、フランスにおいても植民地帝国主義の直接の延長上にある (Liauzu 2000)。
  - 16) フランスは出身民族別の人口統計をとっていないので正確な数はわからないが、1999 年の時点で、フランスに在住するアルジェリア出身の移民の数は約 80 万人、第 2 世代であるその子弟の数は 55 万人と推計されている (Khandriche 1999: 24, 44)。
  - 17) 移民に対する排斥が組織化されたきっかけのひとつは、1974 年の大統領選において、右派の候補者であるヴァレリー・ジスカル＝デスタンが、テレビカメラの前で、移民労働者数 180 万人＝失業者数 180 万人という数字をあげたことにあった (ギヤスパールとセルヴァン＝シュレーベル 1989: 120)。これは極右の国民戦線のスローガンを取り込んだものであったが、この選挙以来、外国人移民に対する襲撃事件があいついだのは偶然ではなかったのである。
  - 18) これらの大規模団地に住むフランス人は (外国人を含める)、全国で約 1300 万人といわれる (Lallaoui 1993: 91)。フランス人の約 4.5 人にひとりがシテに住んでいる計算になる。
  - 19) そうした政策の一環としておこなわれたのが、1990 年代末から社会党政権が試みた、日本の交番制度を模倣した「近隣警察」の制度であった (4-10/12/1997: 9 Le Nouvel observateur)。これは一定の成果を上げたが、政権が変わることによって廃止され、強権的な治安警察の強化に予算が回された。2005 年の事件のときにも、地元住民とのつながりのある「近隣警察」が存在していたなら、騒乱はそれほど拡大しなかったのではないかという声は多数聞かれている (4/11/2005 Libération)。
  - 20) いかに地域と「人種」による差別がおこなわれているか、フランスのあるマスコミが実験をおこなったことがある。それによれば、パリ近郊に住み、マグレブ系の名をもつ一青年が就職のための書類を送ったところ、人事募集をしていた百の会社のうち、面接に呼んだのは一社だけであった。ところがおなじ人間が、「生粋」のフランス人に擬するために、経歴等はおなじままで、住所を変え、名前を変えて履歴書を送ったところ、半数以上から面接の返事が来たというのである (Vidal 2005a)。
  - 21) フランスの移民第 2 世代についての優れた研究をおこなっているコスロカヴァルは、つぎのように書いている。「スカーフをかぶることによって、娘はイスラームの正当性を身にまとい、それ以降、ひとりで街を歩いたり、男たちと外で交際したり立ち話をしたり、もっとも伝統的な家庭においてさえ、彼女の慎ましさが問題にされかねない外で働いたりすることなどの禁止を無視する権利が与えられると信じている。……イスラームのおかげで、彼女たちは個人主義の奨励が具体的実現の不可能性に対になっているような社会のただなかで、彼女たちに欠けていた生の諸原則を手に入れつつ、自立性を構築することが可能になると信じているのである」 (Khosrokhavar 1997: 126-128)。彼女たちのあいだでは、フランス国旗である三色旗をスカーフとして巻いたり (写真 3)、スカーフで頭髪を覆いながら、へそ出し、背中丸出しの格好をするなどの西洋風の流行がはやっているという。自由と解放の象徴であればこそ、スカーフと流行は両立するのである。
  - 22) 都市郊外は伝統的に左翼の牙城であったが、郊外での事件があいつぐなかで、治安の強化と移民の排斥を求める声が高まっており、今日ではフランスのすべての市町村のなかで、極右の国民戦線の伸長がもっとも顕著な地域である (Haegel et al. 2000)。
  - 23) フランスの最難関大学のひとつであるパリ政治学院では、2001 年以來 ZUP の高校生 (その大半が女子学生) を、一般入試とは別な基準で受け入れてきた。その数は 5 年間で 189 名に上る。その学生たちの 75 パーセントが奨学生であり、66 パーセントが両親の両方ないし片方が外国生まれで、60 パーセント前後が両親が無職か単純労働者であるという数字がある (02/12/2005 Libération)。
  - 24) この年のうちに、移民およびその子弟たちが届出を出したアソシエーションの数は 5000



- に上ったといわれる (Amara et Idir 1991: 19)。この権利がかれらに対して開かれることが、いかに望まれていたかを如実に示す数字といえる。
- 25) これは「ブールの行進 (La marche des Beurs)」とも呼ばれている。ブール (Beur) とは、アラブ (Arabe) の逆さことばであり、最初パリで移民第2世代が用いる自称としてはじまり、のちに広く用いられるようになったことばである (近年では、これがさらにひっくり返されてルブー (rebeu) と呼ばれるようになっている。同様に、黒人 (noir) はルノワ (renoi) という)。マチュー・カソヴィッツ監督がシテに住む若者たちを描いた有名な映画『憎しみ (La Haine)』を見ても、若者たちの使うことばは逆さことばやスラングが多く、聞き取るのは容易ではない。
  - 26) シテの若者たちのあいだで、いかに麻薬の密売や密輸入、コピー製品の販売、盗みなどが広がっているかについては、多くの研究がある (Duprez et Kokoreff 2000; Kokoreff 2000)。
  - 27) 2000年の段階で、フランス全土で1600を越えるモスクや礼拝所が設けられている。その数はこの30年間で16倍になったといわれている (2-8/2/2006: 7 *Le Nouvel observateur*)。また、信者の便のために、全国のモスクの住所等やイスラームの結社についての説明が書かれたパンフレットも出版されている (Anonime 2001)。
  - 28) フランスに存在するイスラームの多くは、出身国ごとにイスラーム団体に吸収されている。ここでは帰属が優先され、個人々の宗教的実践はかぎられ、あまり深くは内面化されていないとされる。実際、フランス在住のアルジェリア移民のうちの48%、モロッコ移民の36%、トルコ移民の31%が、日々のイスラームの実践から遠ざかっているという調査結果がある。これがその第2世代になると、アルジェリア系の男子の68%、女子の58%が宗教にほとんど無関心になっているという (Tribalat 1995: 94-97)。
  - 29) IAMのアケナトンがあるインタビューで明言しているように、今日ラップは都市郊外のみならず、フランスの若者のあいだでもっとも好まれる音楽になっている。ところが、それがテレビの音楽番組に登場することは決してないし、コミュニティ・ラジオを除いて、全国的な主要ラジオ局の番組で流されることはない (1-6/12/2005: 40 *Le Point*)。
  - 30) 一連の騒乱がピークに達し、非常事態宣言が出された11月半ばにおこなわれた世論調査によれば、回答者の69%が「暴動」の原因として、「子どもに対する両親の監督の不行き届き」を挙げていた (朝日新聞 2005/11/15)。国民戦線とその追随者の発言は、フランス国民のあいだでかなりの支持を得ていたのである。
  - 31) この点は、竹沢 2007a で論じている。
  - 32) この「統合」をめぐることは、ある種の折衷理論でしかなく、究極的には、各文化集団を単位とする集団主義か、政治の場では一切の文化や個性の出現を禁じる徹底した個人主義しかないとする、政治学者タギエフの批判が存在する (Taguieff 1987; 中野 1996)。一方、1990年代には、フランスに多文化主義を政策として導入することの検討がいくつかの次元で試みられている (Amselle 1996; Wiewiorka ed. 1996)。しかしそれは、フランス式共和制モデルとは相容れないとして拒否されている。
  - 33) 「劣等民族」というのは、フランス共和制の立役者であり、かつフランス植民地主義の定式者であるジュール・フェリーが、国会という公の場で発言したことばである (竹沢 2001: 3章)。
  - 34) その結果、1865年から1937年までの62年間で、アルジェリア人でフランス国籍を取得したのはわずか2500人であった。アルジェリア人に対する国籍付与は、事実上制限されていたのである (Blanchard 2005: 182)。
  - 35) フランスの過去の植民地主義とフランス式共和主義のあいだの矛盾、さらにはそれが今日のフランス国民のあいだで引き起こしている記憶の闘争に関しては、人類学者その他の手で近年出版があいついでいる (Ferro 2003; Dozon 2003; Manceron 2003; Blanchard et al. ed. 2005 など)。西洋と非西洋の関係を再概念化する試みとして、人類学を実践する人間にとっては見過ごすことのできない課題がここにある。
  - 36) この法律は、社会党等の左派政党と多くの歴史学者、さらにはこれを「記憶に対する攻撃だ」とするアルジェリア議会等の反対を押し切って国会で批准された (Winock 2005)。しかし、2005年の騒乱のあと、この事件を「フランス・アイデンティティの問題だ」としたシラク大統領の拒否権によって否認されている。
  - 37) この視点は、民主主義をすでに実現されたものではなく、将来において実現すべきものとするジャック・デリダの理解と重なっている。「民主主義を奉じるということは、異議を唱えること、逆に、異議を唱えられること、〈来るべき民主主義〉の名において、民主主義と

名づけられている現状への異議申し立てを受け入れることなのです。だから私は、来たべき民主主義ということをつねづね主張してきました。民主主義なるものはつねに未来にあります。それはひとつの約束であって、この約束の名においてこそつねに、事実上、民主主義のふりをしている何かを批判し、それを問題にすることができるのです」(シェリフ 2007: 59)

- 38) この調査研究は、人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシア」の研究資金によって可能になった。その後、2007年2-3月にパリとマルセイユで調査をおこなっている。これは、文部科学省科学研究費補助金基盤研究B「ファシズム期の宗教と宗教研究の国際的比較研究」(代表:竹沢尚一郎)によって可能になったものである。あわせて感謝したい。
- 39) 2005年の騒乱に際しては、この高速鉄道内で事件がいくつか起こったことから、アメリカ政府は観光客その他に対し、高速鉄道ではなくバスを利用すること、もし高速鉄道を利用する場合には、ノンストップの列車を利用するよう勧告を出していた。
- 40) パリ北部のサン・ドニ県のある大学生によれば、移民家族出身の彼女は出身中学のクラスで唯一の大学生であるが、おなじサン・ドニ県にあるパリ第8大学に通うのに、パリを経由してバスと電車を1時間半乗り継がなくてはならないという(10-16/11/2005: 35 *Le Nouvel observateur*)。空港にいたる高速鉄道の全駅に下車して、一泊しながら郊外の風景を描いた奇妙な「旅行記」も、パリ郊外における「袋小路の感覚」を描いている(Maspero 2004)。パリ大学は理工系を中心にあいついで分校をパリ近郊に建設し、空港、ハイテクノロジー、ディズニーランドと、最新施設の整備を郊外に進めているが、そこに住む人間のことは全く考慮に入っていないのである。
- 41) マルセイユのモスクは、市内に住むムスリムの出身母体ごとに分かれて建設されている。中央モスクの建設は、出身母体の見解の対立により不可能であったが、ようやく2006年に建設地が決まり、近々建設が開始されるはずだとのことであった(S. B.氏による)。もっとも、南仏の諸都市ではモスクの建設に対して強い反対運動が展開されるのが常なので、この案も計画通り実現されるかは予断を許さない。
- 42) マルセイユ・エスペランスの構成メンバーは、全員が市役所に集まり、平和を訴える声明を出したほか、さまざまなコミュニティ・ラジオ等のメディアを通じておなじ声明をくりかえした(浪岡 2003: 87)。湾岸戦争勃発に際して平静を保つよう呼びかけたこの声明は、時宜を得たものであった。というのも、フランスのいくつかの都市では強烈な反アラブ・キャンペーンが展開され、アラブ・ベルベル系住民の側では武器を準備したり、食料を備蓄したところもあったからである(Wiewiorka 1992: 166)。マルセイユ・エスペランスはいかなる強制力ももたないとはいえ、マルセイユでは各宗教コミュニティが孤立しているわけではないと公に宣言することは、それなりの効果をもちえたのである。
- 43) インタビューは2007年3月におこなわれた。アルメニア教会のZ. A. 神父、ユダヤ教会のC. B. 師、ムスリム団体のB. D. 氏に、別々に話を聞くことができた。それぞれの宗教コミュニティを代表する立場にある3者が口をそろえて言明したのは、マルセイユ・エスペランスの成功の理由は、これが非宗教的な組織であること、そしてマルセイユという地方都市が実践したが、対外的・対内的な代表制の問題が関与せざるを得ないので、会の成立そのものが不可能であっただろう。それぞれの宗教団体と母国との関係性や(たとえばフランスのムスリム組織は、アルジェリア系やモロッコ系、トルコ系などに分割されている)、各宗教コミュニティを代表する資格は誰にあるのかという議論が生じて、収拾がつかなかったはずだということである。
- 44) この発言にもあるように、マルセイユは幾重にも重なった外国からの移民の波によって形成された都市である。その波は、19世紀には主としてイタリアとコルシカからであったが、20世紀初頭には中東各地で迫害されたアルメリア系(8万人)やユダヤ系(8万人)、ジダン(数千人)の移住者が増え、20世紀後半にはフランスの海外県や植民地であったマグレブ諸国(20万人)からの移住者を中心とした(カッコ内の数字は、各コミュニティの代表者が現在の概数として述べたものである)。マルセイユの人口の約半数はカトリックといわれるが、そのかなりの部分がイタリア系、コルシカ系であり、特定の文化的コミュニティが支配的な位置を占めているわけではない。
- 45) S. B.氏が述べたこれらの活動は、フランス、とくに南仏の移民問題研究者であるジョゼリーヌ・セザリのいう、大戦後の移民第一世代の社会運動とそのまゝ重なるものである(Cesari 1994: 174-176)。



- 46) それはとくに 80 年代に、マルセイユの郊外で誕生したラップ・ミュージックを支援し、ラップ・グループとしてフランスではじめて成功した IAM の誕生につながるなど (Sberna 2001)、マルセイユの文化的シーンの発展に大きく寄与したのであった。
- 47) こうした見解は、マルセイユを中心に、移民とその第 2 世代の研究をつづけてきたセザリの見解と重なるものである。「かれらの[宗教的な]実践は、より伝統的な基盤の上でのかれらのアイデンティティの再構成に対応するものである。かくしてイスラームは、失業や軽微な逸脱行為や、しばしばドラッグが日常的であった彷徨の数年のうちに、自己認識と自己肯定をおこなうための信頼しうるオルタナティブとしてあらわれているのである」(Cesari 1989: 64)。
- 48) こうした見解は、フランスの左翼主流の政治家や活動家の多くが述べるものである。しかしながら、学業と就職の回路を通してのフランス社会への「統合」という理想が、現実には文化的差異に根差す差別によりほとんど不可能になっていることは、本稿でくりかえし論じてきた。
- 49) 少し古い資料になるが、1985 年には毎週約 3 万人の人間がマグレブ諸国からマルセイユに、商品や物資の購入に来ていたという (Bertoncello et Bredeloup 2000: 6)。この数は、その後も増加をつづけているのであり、経済的にはすでにマルセイユはフランスの一都市ではなく、地中海都市になっているのである。
- 50) 左翼運動から出発して、今ではマルセイユの移民問題とイスラーム問題の専門家として、市の組織に吸収されているかれの経歴は興味深いものがある。それはわが国で、1960 年代後半から 70 年にかけて学生運動に参加していた活動家が、全国各地のまちづくりの主要な担い手となっているという経歴と重なるものである。かれのアイデンティティについて深くは質問しなかったが、もしひとつを選択するように聞かれたなら、おそらくムスリムだと答えたのではなかっただろう。父親がドイツ系ユダヤ人であり、母親がサウジアラビアの王家につながる女性だったというタラル・アサド・ニューヨーク市立大学教授におなじ問いを尋ねたとき、かれはアイデンティティについて問われることは好きではなかったと断った上で、今はムスリムとして自己定義していると答えられたことを、私は思い出している。
- 51) マルセイユにある大手スーパーは、レジ係として移民系の若い男性を採用している。これはフランスでは他に見られない現象であるが、説明を受けると納得のいくものであった。理由の第一は失業率の高さであり、低賃金のレジ係でも仕事がある方がマシなのである。理由の第二は、ムスリムの両親が娘を家のなかに閉じこめておくことを名誉と考える傾向であり、安定した収入を得たなら娘が家を出て行くことを恐れて、娘が外で働くことを好まないことである(実際、私も高速バスで 30 分ほどのところにあるプロバンス大学で短い会話を交わした北アフリカ系の大学院生が、大学ではカーリー・ヘヤーをしていたのに、マルセイユに向かうバスのなかでは髪を結んでいるのを見て驚いたことがある)。こうした雇用の形式や、ムスリム用のハラルの肉の工場をあいっついで建設したことなどにより、マルセイユのシテの若者の失業率は 37% から 17% まで低下しているという (1-6/12/2005: 41 Le Point)。これが正確であるとすれば、フランスでは例外的に低い数字である。
- 52) なぜ文化は、かくもつねに境界づけられたものとして理解されるのか。この点については他所で論じているので(竹沢 2007b)、ここではその概略を示すにとどめよう。19 世紀を通じて、近代化の後進国ドイツの「国民国家の国民統合のためのイデオロギー」(西川 1993: 4)となっていた「文化」概念を、人類学に持ち込んだのはドイツ生まれのフランツ・ポアズであった。19 世紀が歴史の時代であったかぎり、ポアズが丹念なフィールドワークを通じてめざしたのは、各文化集団が移動や他集団との接触を通じてその文化的特徴をどのように形成したかを、歴史的に再構成することであった。かれのもとでは、文化を閉じたものと見なし、個々の文化の特性を個別的に記述しようとする文化相対主義的視点は支配的ではなかったのである。
- 一方、そうした文化概念に新たな展開を生じさせたのは、ポアズの弟子のルース・ベネディクトやマーガレット・ミードであった。ベネディクトは優れたフィールドワーカーではなかったが、その乏しいフィールド経験のなかで、隣接する諸集団のあいだに「もっとも峻厳な文化的断絶」(竹沢 2007b: 224)が存在するケースがあることを確認していた。このような事例は、諸集団の歴史的接触や相互影響を重視するポアズの観点では説明できないものであった。そこで彼女は、ドイツロマン派的な視点に立つことで、文化は統合的実体と見なされるべきこと、そして各文化は固有の傾向性によって他の文化の諸要素を取捨選択していることを主張した。さらに彼女は、それぞれの文化的特性を比較検討することで、「アポロ

型」や「ディオニュソス型」などと呼んだのであった。ところで、比較をおこなうためには複数の文化を見下ろすことのできる超越的な視点の導入が必要である。かくして、文化を内在的に、「現地人の世界をかれらが見るように見ようとした」(Harris 1968: 316) ポアズの実直な試みは、ベネディクト＝ミード流の一見洗練された比較文化論的視点によって廃棄されたのである。

文化が固定的なもの、境界づけられたものと見なされるには、もうひとつの理由、政治的な背景があった。フランス革命軍に占拠されたベルリンで、哲学者フィヒテは1807年に有名な講演『ドイツ国民に告ぐ』をおこなっている。そこでかれが、統一国家をいまだ実現できないでいるドイツ国民を勇気づけるために、来るべき国家の基礎として挙げたのが、共通の言語、共通の記憶、共通の大地、共通の伝統、共通の宗教、人文的著作であった(フィヒテ 1988)。将来の国家を基礎づけるべきこれらの要素を総称するのにフィヒテが用いたのは「民族」であり、「文化」ではなかった。しかしのちにドイツロマン派の思想運動とともに、民族はより精神的な概念としての文化に置き換えられて、これらの要素を総称する語として用いられるようになったのである(西川 2001: 213-214)。

国民国家の建設がもっとも主要な政治的課題であった19世紀の文脈において、ドイツ的な文化の概念は、普遍的、産業的、理知的、発展的、都市的なものとしてのフランス的「文明」に対抗してかたちづくられただけに、特殊的、精神的、感情的、伝統的、農村的なものというコノテーションをもつことになった。またそれは民族概念と対になって用いられ、来るべき国民国家の精神的支柱として位置づけられたがゆえに、特定の集団に同一化され、明確に境界づけられたものとして認識されることになった。ここで興味深いことは、文化は、物理的不在を埋め合わせる精神的実体として位置づけられたために、根を失った人びとを動員することを可能にする魔法の杖と化したことである。文化は、将来のドイツ国家を基礎づけただけでなく、世界中に輸出されて、来るべき独立国家を支えるための基礎概念として人びとを動員するのに利用されてきたのである(ハーバーマス 2004: 128sq.)。

かくして文化は、自分たちのあいだに同一性を樹立し、自分たちとかれらとを区別するための概念、いいかえるならすぐれて排他的な概念として確立されたのであった。19世紀の国民国家の勃興・発展期に確立され、それゆえに人間をある一定の境界のなかに閉じこめる傾向をもつこの文化の語の内容を作り変え、あるいはそれに変わる語を作り出していくことが、いま求められているのではないだろうか。

- 53) 私はマルチカルチュラリズムを2つに分けた方が有効だと考えている。1つは、複数の文化が共存可能な状況を望ましいと判断し、それを阻害する要因をとりのぞいていくことを求める理念および政策としてのそれであり、「弱い」マルチカルチュラリズムと名づけることができる。もうひとつは「強い」マルチカルチュラリズムであり、各集団の文化とアイデンティティの固有性は尊重されるべきであり、そのためにあらゆる政治的資源が動員されるべきだとする理念と政策である。テイラーをはじめ、キムリッカ、ウォルツァーなどのいわゆるコミュニタリアンは後者の範疇に入れられる(キムリッカ 1998; ウォルツァー 1999)。これに対する批判については、注11を参照。
- 54) 「公共性」と「公共圏」について、明確な区別がなされているわけではない。ハーバーマスのような社会学者は、「公共圏」を一般的な語としてとらえるのではなく、特定の歴史的条件のなかで成立した自由な言論の空間と考えているので、「公共圏」「公共空間」の語を好んでいる(しかし、日本語訳は「公共性」となっている、ハーバーマス 1994)。一方、哲学者アレントとその影響を強く受けた齋藤純一は、社会にとってかくあることが望ましい規範的状態をさす語として「公共性」の語を好む傾向がある(アレント 1994; 齋藤 2000)。
- 55) イタリア人移民が築いたベレル地区(le Bel Air)、ユダヤ系の人びとのベルドメ地区(la Belle de Mai)、アラブ系のベルスンス地区(la Belsunse)、熱帯アフリカ系のノアイユ地区(les Noailles)、そしてフランス系の高級ブティックが立ち並ぶ、高級住宅地としてのプラド地区(le Prado)などである。
- 56) その他、マルセイユの仕事の仕方でもユニークなのは、勤務時間の長さではなく、成果によって評価するゴミ収集の業務である。その結果、マルセイユでは「ゴミ収集車はフェラーリより速い」といわれることになる(1-6/12/2005: 44 Le Point)。マルセイユの市街をタクシーがカーチェイスするリュック・ベンソン監督の大ヒットした映画「タクシー」も、これに着想を得たのかもしれない。

## 文 献

- アバデュライ, アルジュン  
 2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』 門田健一訳, 東京: 平凡社。
- アレント, ハンナ  
 1994 『人間の条件』 志水速雄訳, 東京: ちくま学芸文庫。
- アンダーソン, ベネディクト  
 1987 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 白石隆・白石さや訳, 東京: リポート。
- 稲葉奈々子  
 1998 「90年代フランスにおける「もうひとつの移民問題」」 宮島喬編『現代ヨーロッパ社会論』 pp. 283-305, 京都: 人文書院。  
 2004 「「もたざる者の運動」と自己表象のアート」 石井洋二郎・工藤庸子編『フランスとその〈外部〉』 pp. 105-126, 東京: 東京大学出版会。
- 植村清香  
 2004 「私たちの差異ある〈つながり〉のかたち——フランス・パリ郊外におけるマグレブ系移民第2世代の多民族的共同体」『文化人類学』 69 (2): 271-291。
- ウォルツァー, マイケル  
 1999 『正義の領分』 山口晃訳, 東京: 而立書房。
- 太田好信  
 1998 『トランスポジションの思想』 京都: 世界思想社。
- 梶田孝道  
 1993 『ヨーロッパとイスラム——共存と相克のゆくえ』 東京: 有信堂高文社。
- キムリッカ, ウィル  
 1998 『多文化時代の市民権——マイノリティの権利と自由主義』 角田猛之他監訳, 京都: 晃洋書房。
- ギヤスパール, フランソワーズとクロード・セルヴァン＝シュレーベル  
 1989 『外国人労働者のフランス——排除と参加』 林信弘監訳, 京都: 法律文化社。
- 小谷汪之  
 1982 『共同体と近代』 東京: 青木書店。
- 齋藤純一  
 2000 『公共性』 東京: 岩波書店。
- シェリフ, ムスタファ  
 2007 『イスラームと西洋: ジャック・デリダとの出会い, 対話』 小幡谷友二訳, 東京: 駿河台出版社。
- 重光哲明  
 2006 「フランスの若者の暴動とマスメディア」『現代思想』 34 (3): 146-152。
- 渋谷 努  
 2005 『国境を越える名誉と家族——フランス在住モロッコ移民をめぐる「多現場」民族誌』 仙台: 東北大学出版会。
- シュミット, カール  
 1974 『憲法論』 阿部照哉・村上義弘訳, 東京: みすず書房。
- ジョリヴェ, ミュリエル  
 2003 『移民と現代フランス』 鳥取絹子訳, 東京: 集英社新書。
- 関根康正  
 2006 『宗教紛争と差別の人類学——現代インドで〈周辺〉を〈境界〉に読み替える』 京都: 世界思想社。
- ソジャ, エドワード, W.  
 2003 『ポストモダン地理学』 加藤政洋他訳, 東京: 青土社。
- ターナー, テレンス  
 1998 「人類学とマルチカルチュラルリズム」『現代思想』 26 (7): 157-175。
- 竹沢尚一郎

竹沢 パリ／マルセイユ, 2005.10-11

- 2001 『表象の植民地帝国』 京都：世界思想社。  
2005 「人種／国民／帝国主義」『国立民族学博物館研究報告』 30 (1): 1-55。  
2007a 「移民の観点から見た国民国家」『ユーラシアと日本』 pp. 20-31, 東京：人間文化研究機構。  
2007b 『人類学的思考の歴史』 京都：世界思想社。  
2007c 「近代社会学の成立」友枝敏雄・厚東洋輔編『社会学のアーリーナへ』 pp. 101-130, 東京：有信堂。
- 竹沢尚一郎他  
2007 「公共空間と宗教の変容——フランスの事例を出発点に」『宗教研究』 80(4): 153-159。
- 田辺繁治  
2005 「コミュニティ再考——実践と統治の視点から」『社会人類学年報』 31: 1-29。
- デランティ, ジェラード  
2006 『コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容』 山之内靖・伊藤茂訳, 東京：NTT 出版。
- トゥレーヌ, アラン  
1978 『社会学へのイマージュ——社会システムと階級闘争の理論』 梶田孝道訳, 東京：新泉社。
- 内藤正典  
2004 『ヨーロッパとイスラーム——共生は可能か』 東京：岩波書店。
- 中野裕二  
1996 『フランス国家とマイノリティ』 東京：国際書院。
- 浪岡新太郎  
2003 「フランス共和制とイスラーム」『思想』 5月号：74-96。  
2004 「フランスにおける移民新世代結社と〈新しい市民権〉」内海愛子・山脇啓造編『歴史の壁を超えて』 pp. 249-284, 京都：法律文化社。  
2005 「西ヨーロッパにおける政教関係の制度化とイスラーム」古城利明編『世界システムとヨーロッパ』 pp. 149-173, 東京：中央大学出版部。
- 西川長夫  
1993 「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』 5月号：4-33。  
2001 『増補 国境の越え方——国民国家論序説』 東京：平凡社。
- ハーグリーブス, アリック, G.  
1997 『現代フランス——移民からみた世界』 石井伸一訳, 東京：明石書房。
- 畑山敏夫  
1997 『フランス極右の新展開』 東京：国際書院。
- ハーバーマス, ユルゲン  
1994 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』 細谷貞雄・山田正行訳, 東京：未来社。  
2004 『他者の受容——多文化社会の政治理論に関する研究』 高野昌行訳, 東京：法政大学出版局。
- 浜口恒夫  
2000 「イギリスの南アジア系移民社会」古賀正則他編『移民から市民へ』 pp. 114-132, 東京：東京大学出版会。
- ハンチントン, サミュエル, P.  
1998 『文明の衝突』 鈴木主税訳, 東京：集英社。
- バリバル, エティエンヌとイマニエル・ウォーラステイン  
1997 『人種・国民・階級——揺らぐアイデンティティ』 若林章孝他訳, 東京：大村書店。
- フィヒテ  
1988 『ドイツ国民に告ぐ』 大津康訳, 改訂版, 東京：岩波文庫。
- フィンケルクロート, アラン  
1988 『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』 西谷修訳, 東京：河出書房新社。
- プーランツァス, ニコラ  
1984 『国家・権力・社会主義』 田中正人・柳内隆訳, 名古屋：ユニテ。
- フルコー, アニー  
2004 「フランス二十世紀都市史, その成果と課題」中野隆生・前田更子訳, 中野隆生編『都

- 市空間の社会史：日本とフランス』 pp. 210-234, 東京：山川出版社。
- ベンハビブ, セイラ  
 2006 『他者の権利—外国人・居留民・市民』 向山恭一訳, 東京：法政大学出版局。
- ホブズボーム, E. J.  
 1969 『共同体の経済構造』 市川泰治郎訳, 東京：未来社。
- 宮治美代子  
 1983 「北アフリカ, カビリー地方, 出稼ぎの村」『季刊民族学』 24: 122-130。
- 宮島 喬  
 2006 『移民社会フランスの危機』 東京：岩波書店。
- メルッチ, アルベルト  
 1997 『現在に生きる遊牧民（ノマド）：新しい公共空間の創出に向けて』 山之内靖他訳, 東京：岩波書店。
- 森 明子  
 2006 「大都市と移民—ベルリンにおける「外国人」カテゴリーと「多文化」意識」『国立民族学博物館研究報告』 30 (2): 145-229。
- 森千香子  
 2006 「炎に浮かぶ言葉」『現代思想 特集フランス暴動』 34 (3): 110-117。
- 米山リサ  
 2003 『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』 東京：岩波書店。
- Amara, Saliha et Said Idir  
 1991 Le <mouvement beur>, résumé des chapitres précédents. *Hommes & migrations* 1144: 19-26.
- Amselle, Jean-Loup  
 1996 *Vers un multiculturalisme français: l'Empire de la coutume*. Paris: Flammarion.
- Anonyme  
 2001 *La Mosquée dans la cité*. Paris: La Médine.
- Autain, Clémantine, et al.  
 2006 *Banlieue, lendemains de révolte*. Paris: La Dispute.
- Babès, Leira  
 1996 Le croire dans l'islam de l'intellectualisation à la spiritualisation, L. Babès, dir. *Les Nouvelles manières de croire*, pp. 121-137. Paris: L'Atelier.
- Balibar E. et al.  
 1999 *Sans papiers: l'archaïsme fatal*. Paris: La Découverte.
- Bauer, Alain et Xavier Rauffer  
 2005 *Violences et insécurité urbaines*. Paris: PUF.
- Bazin, Hughes  
 1995 *La Culture hip-hop*. Paris: Desclée de Brouwer.
- Beaud, Stéphane et Michel Pialoux  
 2003 *Violences urbaines, violence social: Genèse des nouvelles classes dangereuses*. Paris: Hachette.
- Beaud S. et M. Pialoux  
 2006 La <racaille> et les <vrais jeunes>. Clémantine Autain, et al. *Banlieue, lendemains de révolte*, pp. 17-27. Paris: La Dispute.
- Bertoncello, Brigitte et Sylvie Bredeloup  
 2000 Commerce africain, réseaux trans-nationaux et société locale. *Hommes & migrations* 1224: 5-21.
- Benhabib, Seyla  
 2002 *The Claims of Culture: Equality and Diversity in the Global Era*. Princeton: Princeton U.P.
- Blanchard, Pascal  
 2005 La France, entre deux immigrations, P. Blanchard, N. Bancel et S. Lemaire, éd., *La Fracture coloniale*, pp. 177-186. Paris: La Découverte.
- Blanchard, P., N. Bancel et S. Lemaire, éd.  
 2005 *La Fracture coloniale*. Paris: La Découverte.
- Boucher, Manuel

- 1998 *Rap: Expressions des lascars*. Paris: L'Harmattan.
- Bourdieu, Pierre, dir.  
1993 *La Misère du monde*. Paris: Seuil/Point.
- Calio, Jean  
1998 *Le Rap: Une réponse des banlieues?* Paris: Entoe Aleas.
- Castel, Robert  
1995 *Les Métamorphoses de la question sociale: une chronique du salariat*. Paris: Fayard.
- Cesari, Jocelyne  
1989 Les stratégies identitaires des musulmans à Marseille. *Migrations et Sociétés*, pp. 66–77.  
1994 *Etre musulman en France: Associations, militants et mosquées*, Paris: Karthala.  
1998 *Musulmans et républicains: Les jeunes, l'islam et la France*. Bruxelles: Ed. Complexe.
- Dewitte, Philippe  
2003 *Deux siècles d'immigration en France*. Paris: La Documentation française.
- Donzelot, Jacques  
1996 L'avenir du social. *Esprit*, pp. 58–81.
- Dozon, Jean-Pierre  
2003 *Frères et sujets: La France et l'Afrique en perspective*. Paris: Flammarion.
- Dubet, François  
1987 *La Galère: Jeunes en survie*. Paris: Points/Arthème Fayard.
- Dubet, François et Didier Lapeyronnie  
1992 *Les Quartiers d'exil*. Paris: Seuil.
- Duprez, D. et M. Kokoreff  
2000 Usages et trafics de drogues en milieux populaires. *Déviance et société* 24(2): 143–166.
- Etienne, Bruno  
2001 Marseille comme exemple d'interaction ville-religions: l'association Marseille-Espérance. F. Fregosi et J.-P. Willaime, ed., *Le Religieux dans la commune*, pp. 164–181. Genève: Laber et Fides.
- FASILD (Fond d'action et de soutiens pour l'intégration et la lutte contre la discrimination)  
2003 *Les Discriminations des jeunes d'origine étrangère dans l'accès à l'emploi et l'accès au logement*. Paris: La Documentation française.
- Ferro, Marc, dir.  
2003 *Le Livre noir du colonialisme*. Paris: Robert Laffont.
- Fourcaut, Annie  
2000 De la classe au territoire ou du social à l'urbain. *Le Mouvement social* 200: 170–176.
- Gaspard et Khosrokhavar  
1995 *Le Fourard et la république*. Paris: La Découverte.
- Gupta, Akhil and James Ferguson  
1997 Beyond 'Culture': Space, Identity, and the Politics of Difference. A. Gupta and J. Ferguson, eds., *Culture, Power, Place: Exploration in Critical Anthropology*, pp. 33–51. Durham: Duke University Press.
- Habermas, Jürgen  
1981 New Social Movements. *Telos* 49: 33–37.
- Haegel, Florence, H. Rey et Y. Sintomer  
2000 *La Xénophobie en banlieue: Effets et expressions*. Paris: L'Harmattan.
- Harris, Marvin  
1968 *The Rise of Anthropological Theory*. New York: Harper & Row.
- Hervic, Jean-Marie, éd.  
2004 *La Laïcité dévoilée*, Les dossiers de Libération. Paris: l'Aube.
- HCI (Le Haut Conseil de l'intégration)  
1991 *Pour un modèle française de l'intégration*. Paris: La Documentation française.
- Huntington, Samuel P.  
1968 Foundation of Application. *Foreign Affairs* 46: 642–656.
- INSEE  
1994 *Les Etrangers en France*. Paris: La Documentation française.



- Jazouli, Adil  
1992 *Les Années banlieues*. Paris: Seuil.
- Kepel, Gilles  
1991 *Les Banlieues de l'Islam*. Paris: Point/Seuil.
- Khandriche, Mohamed, dir  
1999 *Le Nouvel espace migratoire franco-algérien*. Paris: EDI-SUD.
- Khosrokhavar, Farhad  
1997 *L'Islam des jeunes*. Paris: Flammarion.
- Kokoreff, Michel  
1999 Tags et zoulous: une nouvelle violence urbaine. *Esprit* 169: 23–36.
- Kokoreff, Michel  
2000 Faire le business dans les quartiers. *Déviance et société* 24(4): 403–423.
- Lallaoui, Mehdi  
1993 *Du Bidonville aux HLM*, Syros.
- Lepoutre, David  
1997 *Cœur de banlieue: Codes, rites et langages*. Paris: Odile Jacob.
- Liauzu, Claude  
2000 Immigration, colonisation et racisme: Pour une histoire liée. *Hommes & migrations* 1228: 5–14.
- Madec, Annick et Numa Murard  
1995 *Citoyenneté et politiques sociales*. Paris: Flammarion.
- Manceron, Gilles  
2003 *Marianne et les colonies: Une introduction à l'histoire coloniale de la France*. Paris: La Découverte.
- Maspero, François  
2004 *Les Passagers du Roissy-Express*. Paris: Points/Seuil.
- Maurin, Eric  
1991 Les étrangers: une main-d'œuvre à part? *Economie et statistique* 242: 39–50.
- Mauss, Marcel  
1950 Rapports réels et pratiques de la psychologie et de la sociologie. Mauss, *Sociologie et anthropologie*, pp. 281–310. Paris: P.U.F..
- Medam, Alain  
1995 *Blues Marseillais*, Jeanne Laffitte.
- Moreau, A. et J. Cesari  
2001 *Plus marseillais que moi, tu meurs*. Paris: L'Harmattan.
- Peraldi, Michel et Michel Samson  
2005 *Gouverner Marseille: Enquête sur les mondes politiques marseillais*. Paris: La Découverte.
- Schnapper, Dominique  
1994 *La Communauté des citoyens: Sur l'idée moderne de nation*. Paris: Gallimard.
- Sberna, Beatrice  
2001 *Une sociologie du rap à Marseille: identité marginale et immigré*. Paris: L'Harmattan.
- Simon, Patrick  
2003 Le logement social en France et la gestion des 'populations à risques'. *Hommes & migrations* 1246: 76–91.
- Soja, Edward W.  
1985 The Spatiality of Social Life. D. Gregory & J. Urry eds., *Social Relations and Spatial Structures*, pp. 90–127. London: Macmillan.
- Taguieff, Pierre-André  
1987 *La Force du préjugé: Essai sur le racisme et ses doubles*. Paris: Gallimard.
- Tarrus, Alain  
1992 *Les Fourmis de l'Europe*. Paris: L'Harmattan.  
1999 Les fluidité de l'ethnicité. *Déviance et société* 23 (3): 259–274.
- Temime, Emile  
1999 *France, terre d'immigration*. Paris: Gallimard.

竹沢 パリ／マルセイユ, 2005.10-11

Touraine, Alain

2005 *Un Nouveau paradigme: Pour comprendre le monde d'aujourd'hui*. Paris: Arthème Fayard.

Tribalat, Michèle

1991 *Cent ans d'immigration, Etrangers d'hier, Français d'aujourd'hui*. Paris: PUF-INED.

1995 *Faire France: Une grande enquête sur les immigrés et leurs enfants*. Paris: La Découverte.

Viard, Philippe

1984 Les crimes racistes en France 1973-1983. *Les Temps modernes* 452/455: 1942-1952.

Vidal, Dominique

2005a De L'histoire coloniale aux banlieues. P. Blanchard et al., éd., *Culture post-coloniale, 1961-2006*, pp. 176-186. Paris: Autrement.

2005b Casser l'apartheid à la française. *Le Monde diplomatique*, décembre: 20-21.

Vieillard-Baron, Hervé

1991 Le risqué du ghetto. *Esprit* 169: 14-22.

Wihtol de Wenden, Catherine

1997 Que sont devenues les associations civiques issues de l'immigration? *Hommes & migrations* 1206: 52-66.

Wieviorka, Michel

1992 *La France raciste*. Paris: Point/Seuil.

Wieviorka, Michel, dir.

1996 *Une Société fragmentée? Le multiculturalisme en débat*. Paris: La Découverte.

Winock, Michel

2005 Une république très coloniale. *L'Histoire* (octobre): 40-47.

Young, Iris Marion

1990 *Justice and the Politics of Difference*. Princeton: Princeton U.P.

## 新聞・雑誌

朝日新聞

Le Nouvel observateur

Le Point

L'intelligent, Jeune Afrique

Livération